



教職大学院 Newsletter

特集号

Vol.2 (No.134)

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2020.5.2

2019年度は最終カンファレンスを実施することができませんでした。そこで、修了生、在学生、スタッフそれぞれの思いを載せて、紙上カンファレンスとして2号に分けて特集号をお届けすることになりました。本号は第2号です。

巻頭言にかえて

福井大学連合教職大学院の最終カンファレンスに寄せて

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科副研究科長 淵本幸嗣

記録は、プロフェッショナル・ラーニングコミュニティの学びを確かなものにする

今年も、修了生が長期にわたる実践記録を書き上げました。例年であれば、最終のカンファレンスの中でそれぞれの学びについて総括するのですが、本年度は、新型コロナウイルス対策ということで中止となってしまいました。貴重な学びの機会を失い、もったいないなと思っていたら、「せめて紙上でのカンファレンスをやりましょう。」という提案が出されました。例年のことですが、院生の皆さんとの協働研究で、多くのことを学ばせていただいています。貴重な実践の記録を読むことで、私は大きな刺激を受けています。上質の実践記録を読み込むことで、自分自身が省察を深め、新たな視点で自分自身の実践を捉え直すことにつながるからです。真っ先に読ませていただく読み手として、至福の時を過ごさせていただきました。

課題やプランを明確にして、実践し、省察して、また次の実践に向けての戦略を練り直していくというサイクルが継続していく中で、学校改革は少しずつ進展していくものです。それ故、実践は長期にわ

たるものとなり、その記録は、多くの仲間たちが学ぶべき価値のあるものになります。

今年度も、貴重な実践の記録が数多く刊行されました。若手、中堅、そして管理職を目指す皆さんの記録は、長期にわたる教員の歩みを丁寧に描くものであり、今後、教職大学院での教材や免許更新講習での教材として、活用されることになります。これ

内容

巻頭言にかえて

在学生

授業研究・教職専門性開発コース
ミドルリーダー養成コース
学校改革マネジメントコース

修了生

授業研究・教職専門性開発コース
ミドルリーダー養成コース
学校改革マネジメントコース

スタッフ

50音順で掲載しています。

所属は令和元年度のものです。

らはとても贅沢な教材で、全国に類のないものです。このような実践記録の蓄積は、福井大学が地域に貢献する教員養成大学として確かな信頼を勝ち取るためのエビデンスの一つであり、学校の教員や管理職だけでなく、チーム学校を支える教育委員会の関係者等、一人でも多くの人に読んでいただきたいと思います。

学校改革マネジメントコース、ミドルリーダーコースの学びを深めるために確認したいこと

学校改革マネジメントコースについてコメントしたいと思います。学校改革マネジメントコースは、文字通り学校文化の改革を目指しています。この度、3期目の修了生を送り出すことになりました。コース開設の背景としましては、教育界は多くの難しい課題が山積しており、限られた時間の中で、世代間ギャップを乗り越えて、質の高い教育を実践しなければならないという状況が挙げられます。今後、変化の激しい時代が来ることを見据えて、学校も、りよくフレキシブルに変わっていかなければなりません。マネジメントの力量が益々求められるようになります。

それぞれの学校の置かれた状況は千差万別であり、一つのモデルや型を押し付けても意味がないでしょうし、学校評価で数値の変化を示されたとしても、内実がどうなのかは、さっぱり見えてきません。

今回は、紙面ということにはなりましたが、修了される皆さんに感謝の念を表するとともに、カンファレンス等で改めてお聴きしたかったこと、特に確認しておきたかったことについて、以下に書き記したいと思います。また、現在、在学中の院生の皆さんにおかれましても、ご自身の実践の省察に生かしていただければ幸いです。

- ・学校の課題は、どのようなことですか。
- ・勤務する学校のミッションとビジョンを自分の言葉で語ってみてください。
- ・どのような実践が効果的だったと思いますか。手応えがありましたか。
- ・ファシリテーター役として、何を心がけましたか。

- ・ひと、もの、かね、時間、情報等をどのようにやりくりしましたか。
- ・人事異動で、新しく仲間になった人や若手にとって、居心地の良い学校となるためにどのようなことを心がけましたか。
- ・コアのメンバー、協力的なメンバー、無関心なメンバー、批判的なメンバーの変化について語ってみてください。
- ・新たに生じた課題は何ですか。その課題にどのように立ち向かいますか。
- ・働き方改革の中で協働の時間をどのように確保しましたか。
- ・Society5.0やOECD2030を見据えた研修が行われていますか。
- ・実践を互恵的に語り合い、学び合い、記録していますか。
- ・探究的な学び、協働の学び、学校改革等を阻害する要因は、何なのでしょうか。
- ・勤務する学校の危機管理、コンプライアンスはどのように機能していますか。
- ・管理職との協働の中で影響を受けたことは、どのようなことですか。
- ・教職大学院を修了する今、どのようなことを次の世代に伝えたいですか。
- ・今後、どのような学校づくりを目指したいですか。

未来を見据えて議論すべき探究課題

令和の時代になり、世界はますます混沌とし、変化の激しい時代に突入しているように思われます。AIの進化も目覚ましく、Society5.0の社会の中でどのように生き抜いていくのか、世界的な課題となっています。

そのような背景の中で、今日の日本の教育事情を考えたとき、働き方改革を進めながらも質の高い教育が求められています。加えて福井県においては、大きな世代交代の時期にも重なり、若手の人材育成は、喫緊の課題となっています。

「働き方改革と学び合う学校づくり」は極めて重要なテーマであり、学校拠点の専門職大学院を掲げ

る福井大学としては、この複雑で困難な学校の課題解決に向けて、実践的な協働研究に取り組む責任があります。いかにして実践の中から「組織・コミュニティ・カリキュラムのマネジメント」の重要性を見取り、自分たちの実践に編み込んでいくか。そのような作業から逃げることはできません。それは、教師教育の在り様を探究する教職大学院の課題であり、学校改革マネジメントコースの皆さんに課せられた共通の課題でもあります。そして、それは長期にわたって、継続的に協働探究すべき課題なのです。

それ故、このテーマでラウンドテーブルのゾーンB1で語り合い、長期実践報告に記録化していくことは、これからの教師教育の進展において、大変意味のあることだと考えます。

これからの学校づくりで重要になる評価規準

福井県教育総合研究所で実施されている県のマネジメント研修を修了された皆さんが、福井大学連合教職大学院の学校改革マネジメントコースに引き続き入学されるようになりました。これは、福井県教育委員会と福井大学との長年にわたる協働研究の結実であり、大きな転機であります。

県のマネジメント研修では、学校における実践的な取り組みを重視して、これまでの画一的でアラカルト的な集合研修を根本的に改め、継続的な学校改革に挑戦しています。ミドルリーダーと校長とが、1年間にわたる学校改革の実践報告をスカイプで生き生きと語る姿を拝見して、確かな手ごたえを感じています。

研修生からは、「成果が上がりました。」という報告だけではなく、「新たな課題が生まれました。」というような報告も出されています。実践を一回やって終わりというような取り組みではなく、省察をした後に次年度に向けてどのようにサイクル化していくかというような戦略も出されています。そのようなことを引き続き教職大学院の学校改革マネジメントコースで深めていくことは、大きな意義があります。

そこで確認しておきたいことは、「あれをしました。」「これをしました。」というような学校づくりの紹介ではなくて、未来の学校づくりや教師教育を見据えた学校評価の規準です。特に重要と考えていることを以下に3点示したいと思います。

- ・専門職が省察の実践者として、主体的、自律的、継続的に学び続けているか。
- ・授業を公開して、仲間と共に授業研究を継続的に実践し、記録を残しているか。
- ・多様な考え方を尊重して、コミュニケーション力を高め、協働研究を実践しているか。

未来を生き抜く子どもたちの教育に必要なことは数多くありますが、敢えてキーワードで示すならば、「自律」「主体性」「協働」「コミュニケーション」「レジリエンス」を挙げたいと思います。そのような力を子どもたちに培うためには、専門職である教師自身の学びがこれらのキーワードとリンクしていなければなりません。組織力を高めて保護者や地域の期待やニーズに応えてほしいと思います。その際、これらの評価規準をもとに省察することで議論が深まれば幸いです。

今春から教壇に立つ皆さんに

最後に今春から教壇に立つ皆さんに伝えたいことがあります。それは、教師が成長するためには、「授業を公開し、仲間と授業研究を継続し、実践記録を書き続ける」ことが何より大切だということです。

このことは皆さんが教職大学院で体験されたことそのものですが、このことを肝に銘じてほしいと思います。皆さんが、「プロフェッショナル・ラーニングコミュニティ」創造の貴重な担い手として、有意義な人生を歩んでいかれることを切に期待します。



修了生 授業研究・教職開発専門性コース

(所属はインターシップ校)

この2年間の振り返りと今後の展望

奈良女子大学附属中等教育学校 西澤央泰

長期実践報告にも記しているが、私は大学院入学前まで、特別に大きな失敗や挫折を経験することなく、生活してきた。人から与えられた課題をこなしていくことで、順調に人生を歩んできているように見えていた。自ら何かを考えたことが無かったのである。大学院入学当初も、インターンが続けていくうちに何か自分が取り組みたいと思うことができるだろうと高を括っていた。

だが、その想定は甘かった。インターンが続けていても、自動的に課題が出てくるわけではなかった。毎週の木曜カンファレンスで見聞きし感じ考えたことを語ろうとするも何を語ればいいのか分からない。起こった出来事に対する意味づけができない。それは、自分がどのような教師になりたいかを考えたことが無いこととつながっていたように思う。その課題を認識してからは、私は自分がどんな教師になりたいかを明らかにすることを目標にインターンが続けていった。

この2年間の生活を終えて出た現時点での答えを記しておく。1つ目は、生徒が頭を働かせて行動するための環境を作る教師になりたいということである。授業実践の中で最も意識してきたことがこのことである。学校の主役は生徒であり、彼らが活躍する環境を整えるのが教師の役割であると、この2年間のインターンの生活を通して強く感じている。生徒たちにただ指示を出し、生徒が何も考えずに指示に従うような授業を行うのではなく、生徒たちにも考える機会を与え、考える習慣がつくような授業を

作りたいと思う。これは、授業以外の教育活動でも当てはまる。様々な教育活動の機会に、「よりよくするためにはどうすればよいのか?」「本当にそうなのか?」「これはどんな意味を持つのか?」などの問いを生徒に考えさせていきたいと思う。

2つ目は生徒だけでなく、自分も考えることを続けるということである。この教職大学院で教わったことに「『作業』ではなく『仕事』をする。」というものがある。現時点での認識では、『仕事』とは、どのような目的のためにどんな手段を選び行動するのかを考えることであると思っている。「その作業をすることにどんな意味があるのか?」「本当にその作業でいいのか?」「その作業をすると何が起るのか?」ということを常に考えながら、「仕事」のできる教師になっていきたいと思う。

この2つは「考える」という点で教師も生徒も行動することの内容は同じであると思う。生徒に考えさせ、自分も常に考えて生活することのできる教師になっていきたいと思う。考えた結果出る答えは同じではないかもしれない。だが、そうして考え続けることによって、教師としての歩みを進めていくことが出来るのではないかなと思う。

また、この2年間は自分について意識が集中しすぎて、生徒や同僚の先生方に注意を向けることが出来なかった。自分だけでなく、自分の身の周りの人々にも注意を向け、その様子を認識できるように精進していきたい。

“物語る”学びを続けていくこと

福井市中藤小学校 家高 里佳

寒い冬を越え、車窓からは満開の桜を望むことのできる春陽麗和の好季節となりました。ひとりの小

学校教員としてスタートをきるその時を目前に控えた今、2年間の教職大学院での学びを改めてここで振

り振り返り今後の展望を記すことは、スタートをきる私の背中を押してくれるものであると感じています。

さて、修了にあたり2年間の実践を自分なりの捉えで書き記した長期実践報告書においては、自己の学びについて考える機会を頂きました。そして、教職の専門性に限定されず、すべての学習者にとって“物語る”という学習様式が、学びを確かなものにしていくためには非常に重要な役割を担うということに気が付きました。そのような“物語る”学びを継続していくことが、より確かな学びを獲得していく、より専門性を高めていくために必要なことなのではないかと考えるに至りました。そのような学びにおいては、常に他者や対象世界との対話があること、なにより自分自身との対話が十分にあることが言えるのではないかと思います。何度も何度も自分の実践について考察すること、その文脈を捉え直そうとすること、そのように自身の実践を振り返り要素を抽出して再び構築する“物語る”学び。実際に心がけながら様々な方に自分の語りを傾聴してもらう機会を得ましたが、自分の実践を捉え直して要素

を抽出する、そしてそれらの要素を再構築して“物語る”ことの難しさを痛感する日々でありました。長期実践報告書の執筆。報告書を用いた語り。そこで、膨大な要素から“物語る”学びを生み出すには、日々“物語る”学びを積み重ねていかなければならないのではないかという考えも持ちました。そのような習慣的な学びの積み重ねを経ることでより膨大な要素を抽出・再構築する学ぶ力が身についていくのかもしれないと思いました。自分自身、未だ満足に“物語る”学びが出来ているわけではありませんが、子どもたちと共に少しずつ、“物語る”を上達させていきたいと考えています。4月からは、子どもたちとともに学ぶ教師を目指して奮闘していきたいと思っています。

最後に、この2年間ともに学び続けてくださった多くの先生方、インターン校の子どもたちに感謝し、これから出会う子ども、保護者、先生、地域の方々からも様々なことを学ばせていただきながら、教職の専門性を高めていけたらと考えています。今後とも、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

教職大学院での学びの日々

福井大学教育学部附属義務教育学校 橋爪志歩

私は、小学校免許の取得を目指し、小学校免許プログラムを履修していたため、3年間この教職大学院に在籍しました。私の3年間の学びに特に大きな影響を与えたのは、1年目のインターンシップでの経験でした。1年目を振り返ると、インターンシップに行っている、あまり授業に重きを置いていない自分がいたことを覚えています。授業と学級経営を別々に捉え、教師と子どもの関わりを重点的に見ていました。しかし、1年目のインターンが始まって2カ月ほど経ったとき、Sさんが言った言葉が私のその偏った見方を変えてくれました。そのSさんの言葉は、「自分たちが学んでいて楽しくて、認められ感が感じられる授業がいい。」というメッセージが込められた言葉でした。私は、1年目の終わりにその言葉を思い出し、自分のインターンでの見方や学び方を変えました。授業は子どもと教師の学校生活の一部であるということ。いや、子どもにとって学校生活の大半の時間が授業であること。その時間の中で、子どもたちが主体的に学べる授業をデザインしながら、教師と子ども、子どもと子どもの関係

を築いていかなければならないということをSさんの言葉から教わりました。Sさんの一言からこれだけ自分の視野を広げることができたのも、教職大学院でのカンファレンスやラウンドテーブルのおかげだと思っています。実践の場での出来事を持ち帰り、様々な立場の方々と話をすることで、自分になかった見方や考え方が広がっていくのを感じました。私はその後も、子どもの「声」を聴くことを大切に、授業研究にも力を入れながら学んできました。子どもの「声」には、何かしらの思いやその根拠があると思いながらも、自分では捉えきれていない部分は、その様子や授業を見ていただいた方々から助言をいただくことも多々ありました。この3年間の経験を踏まえ、改めて子どもの「声」を聴き、学び続けることの大切さを実感しています。現場に出てからも、いつでもどんなときでも子どもの声に耳を傾け、「子どもに寄り添った教師」でありたい。そして、子どもたちが学級の中で認められ感を感じながら学んでいけるような授業や学級経営をしていきたいと思っています。

そして修了を迎えた今、ここでの3年間を思い返して同期と話をしました。「3年間が終わったね。」という一言の次に出てきたのは、「つらかったね。」という一言でした。そんな言葉が初めて出てきたかと思えば、その一言に、そこにいた同期が強く頷きました。私は、その言葉を噛み締めながら、それがただ「つらかった」という感情だけではないように感じました。どういうことかを自分なりに考えたとき、この「つらかったね。」という一言には、もちろんつらかったという感情が含まれているけれど、それ以上に、つらいことを乗り越えてきた自分たちは絶対に成長しているという達成感のようなものを

感じました。この3年間、私は、それまでの経験ではなかったような、「つらい」「苦しい」と思うような出来事や場面に何度もぶつかってきましたが、その度に、周りの人たちに支えられ助けてもらいながら乗り越えることができたと思っています。教職大学院の先生方、インターンシップ先でお世話になった先生方、院生のみなさん、関わってくださったみなさんのおかげで自分なりに成長することができたと思っています。ありがとうございました。3年間この教職大学院で学んできたことを糧に今後も学び続けていきたいと思っています。

省察的实践者を目指して

福井市中藤小学校 服部哲也

桜が咲き始め、春の訪れが来ている中、修了式や謝恩会が中止になってしまい、再出発カンファレンスさえもなくなってしまったことを非常に残念に感じております。この3年間多くの先生方に支えられ、歩んできた軌跡を先生方とともに語り合い、聴き合い、そして、学び合えたことに本当に感謝しております。ここで一度お礼を伝えさせていただきます。本当にありがとうございました。

3年間を振り返ると、私は大きく分けて2つのことに重点をおいて学んできたように思います。

まず1つ目は、人と人とのつながりについてです。私は大学院に入学当時、「理科教育に力を入れたい」という曖昧な目標からインターンやカンファレンスがスタートしました。なぜなら、理系学部を卒業したという背景しかなかったためです。しかし、大学院で学んでいく中で、徐々に目標や課題は変化していきました。省察していく中で、目標や課題が変化していくことはインターンでの状況や背景、またカンファレンスの話題、学んできた過程などが大きく関係していることに気づきました。背景や過程が目標や課題を変化させ、さらに省察を重ねることで再び自己を見つめ、捉え直すことができ、意味付けや価値付けができたのではないかと思います。そして、私がこの3年間を通しての大きな課題とい

うのは、長期実践研究報告書のタイトルでもある『「個」と信頼を築き、協働的な「集団」形成を目指して-他者を“受け入れるからのスタート!”-』というものでした。私と子ども、子どもと子ども、私と先生方など多くの人と人との信頼関係を築いていくことで、集団が形成されていき、その信頼関係が深いほどより協働的な集団になっていくのではないかという思いで、この課題に取り組んできました。もともと私は自分に自信がもてず、他者の意見にも耳を傾けることが難しく感じていた時期がありました。しかし、周りの院生や先生方は私の話を最後まで聞いてくださいました。そんな姿を見ていくうちに、私は心を開き始め、“受け入れる”ことができるようになっていました。そこから徐々に信頼関係ができてきたように思います。子どもとの関わりも“受け入れる”ことで認め合えるようになり、信頼関係を築いていきました。私は大学院に入学して、自己を見つめ直し、人と人との関係について深く考えてきました。

2つ目は省察するということです。私が考える省察とは、1つ1つの実践や行為を反省し、考察することで、自己を見つめ直し、自身の思いや考えを再構築していくことです。省察をすることで、気付かなかった点が気付けるようになりました。今までは

なんとなく課題意識をもってインターンに取り組んでいました。しかし、なぜそのような課題になったのか、なぜその課題に取り組んでいるのか、取り組んでいる間は分からず、なんとなくの日々を送っていたことが多かったと思います。大学院ではカンファレンスなど、多くの省察する機会が設けられており、その省察を通して、自分が取り組んでいたことの意味付け、価値付けができるようになったと思います。普段何気なくしている行動や言動でも「なぜこの行動をしているのか」とより一層深く考えてから判断し、以前より臨機応変な対応ができるようになりました。この大学院に入学して、行動や言動に価値付けや意味付けをする習慣、常に記録を残す習慣、振り返る習慣が自然に身に付いてきたような気がします。

今後も課題意識を持ち続け、学び続けたいと思っています。春から高校化学を教えることになりました。今後の展望としては、子どもに理科でどのような資質・能力を付けさせたいかを考えたいと思っています。これは私が大学院入学当初に考えていたことに近いと思います。しかし、変わった点としては

「理科を」ではなく、「理科で」教えていくことです。私がこれまでに学んできた人と人とのつながりは各教科を学んでいくことで子どもたちが培っていく力だと思います。それでは理科はどのような役割をもっている、子どもたちがどのような力を培うことができるのか、それをより深く追求していきたいと思っています。大学院でももちろん探究してきました。小学校理科授業実践もたくさん経験させていただきました。学習指導要領も何回も読みました。これらの探究をしていく中で、教員によってどのような資質・能力を培っていきたいかは様々であるように感じました。私の実践の中で長いスパンをかけて、どのような力が培うことができたのか、実際に年間を通して授業を実施し、実感していきたいと考えています。

最後になりますが、先生方とまた学校現場で出会うことができることを楽しみにしております。またお会いしたときは何卒よろしくお願い致します。本当に3年間多くの先生方に支えられてきました。ありがとうございました。

教員の魅力を再確認した3年間

福井県総合教育研究所 松野 智志

初めて教壇に立った学部4年生の教育実習から3年半が経つ。つい先日のことのようにも思えるが、その間には数え切れないほどの出会いや学びがあった。これらは教職大学院だからこそ得られたものであり、非常に貴重な時間だったことを実感する。教職大学院での様々な実践や対話の中で、教員という仕事への認識は次第に変容していき、私を大きく成長させてくれた。その一方で、教員という職業への疑問や違和感にも気づかされた。一人ひとりの子どもの居場所をつくる教員を目指して教職大学院に進学したが、いつの間にかその目標を見失い、自分がどうしたいのかさえも分からなくなったこともあった。しかし、様々な困難や課題があることを分かっ

ている、もしくは今まさに直面していながらも、何故私達は教員という仕事に魅力を感じるのだろうか。

思えば、小学校の入学以来、教員への憧れや尊敬の気持ちが途絶えたことはない。また、身内に教員が多いこともあり、常に頭の隅には職業としての教員があった。しかし、学校が好きだったかといえそうではない。むしろ、私が教員を志した原点をたどれば、いじめや暴力・暴言などといった他者への攻撃が当たり前の教室に恐怖を感じていた日々に行きつく。黒板の上に貼られた『みんな仲良く〇年〇組』や『一人はみんなのために、みんなは一人のために』などといった学級目標は戯言にしか見えなかった。今考えるとずいぶん生意気だが、「こんな自

分のような思いをする人を増やしてはいけない」と思ったことが教員の道への出発だった。

それから10年以上が経ち、受講し始めた教職課程。最初は軽い気持ちだった。当時通っていた大学では時間の流れとともに受講生が減少していったが、私は学ぶほど奥の深さに引き込まれていった。そして、母校での教育実習をきっかけに教員を真剣に志し、教職大学院へ進学した。かつて抱いた思いを胸に学校現場でのインターンが始まると、一人ひとりの生徒を見守り、状況を把握することがいかに難しいことであるかはすぐに痛感させられた。日々の多種多様な業務をこなしていくためには、子どもたちに割ける時間は非常に限られている。常に限界を超えて働く先生方に漂う閉塞感はとても責められないと思った。しかし、どれほど厳しい状況であっても、子どもたちの健全な成長のために試行錯誤を繰り返す先生方の姿を目の当たりにしてきたからこそ、教員という仕事に魅力を感じ続けられたのだと思う。また、教員は内面にどれほど葛藤を抱えていても、生徒の前ではお手本としてあり続けなくてはならない。とはいえ、決して万能な人間ではなく、ごくごくありふれた普通の人間である。自分の限界に気づき、周囲の意見や協力を求めることを厭わず、対話を重ねていける人こそが、子どもたちにとってより良い学校を創っていけるのだと考える。

もしも、学部を卒業してそのまま教員の世界に足を踏み入れていればどうなっていたかは分からない。ストレートマスターという立場では得られない経験や気づきもあっただろう。教員としての3年分の実

践は今とは違った形で私を成長させてくれたかもしれない。とはいえ、どこかで壁にぶつかり、限界を感じていたはずだ。それどころか、教員という仕事に対して悲観的になっていた可能性も大いにある。もちろん、学校インターンの中でも様々な場面で課題に直面し、心が折れそうになったことは一度や二度ではない。しかし、その度に周囲の先生方にご指導くださったし、私も気後れせずに頼らせていただいた。同い年の先生から管理職のご経験がある先生まで幅広く技術や考え方などを吸収できたのも、この教職大学院だからこそ可能だったのだと実感している。

これから私はいったん学校現場から離れることになる。しかし、決して教員という仕事に希望を持てなかったり、諦めたりしたわけではない。むしろ、年間を通して多忙な日々を送りつつも、子どもたちのために日々尽力している先生方やストレートマスターの姿を見ていると、学校を少しでも良くするために自分も尽力したいという気持ちが高まってくる。とはいえ、今の私は学校の世界しか知らない。だからこそ、一度別の世界へ飛び出し、学校の外から学校を考えてみることにした。共に歩んできた同期や後輩たちとは異なる道を進む寂しさもあるが、私も誠心誠意自分の仕事に取り組んでいく。また、どのような形になるかは全く分からないが、お世話になった教育現場には必ず恩返しをしたい。その時には、しっかりと良い影響を与えられる存在となれるようにこれからも学び続けていこうと思う。

修了生 ミドルリーダー養成コース

教職大学院での2年間を振り返って

福井大学教育学部附属幼稚園 上田 晴之

1 異校種の先生方と語ることで見えてくる幼児教育

教職大学院に入学して、毎月のカンファレンスの中で異校種の先生方とテーブルを囲んで、いろいろと語り合うことができた。小中高と様々な先生方の取り組みや考え方を聞く中で、参考になることも多く、幼児教育と同じ部分、違う部分なども見えてくるきっかけになった。また、様々な先生方に幼児教育について説明をするということは、まずは幼児教育全体、幼児教育の組織や考え方などについて、さらに遊びの豊かさや遊びの中の学び、遊びの意義など、まずは自分自身が深く考え、言語化していかないといけないということを実感し、苦慮した。しかし、一つ一つ言語化し、自分の実践や幼児教育について言葉として伝えていくことで、自分の中でも遊びについて理論的にも理解を深め、また、異校種の先生方からは、違う方向から幼児教育について分析していただき、語り合うことによって、自分に得るものはとても大きかったと考える。

そして、改めて3つの資質能力を育てていくことは、幼児から小中高へとつながっていて、だからこそ幼稚園での資質・能力の育ち、芽生えについては我々が異校種の先生方にしっかり伝えていかないといけないとも自覚した。

2 様々な書籍、実践から読み取ることができるもの

教職大学院では、「コミュニティ オブ プラクティス」を始め、いろいろな書籍や実践を読み、語り合う機会があった。本を読んでいなくても、その本を読んだ先生からの話や捉え方を聞くことで、内容を理解することもできた。実践コミュニティを作る大切さ、システム思考、援助の大切さ、学びの芽やたねを育てていくことなど、様々なキーワードに触れることもできた。様々な考え方、ワード、視点などを自分の中に入れながら、周りの先生方と語りあい、自分なりの考えを新たに作り出していく、生まれてくるのが楽しくて、読んだ書籍について、自分の考えをアウトプットしていく重要性というものも、教職大学院で感じたことのひとつである。

3 ミドルリーダーとしての自覚

実践コミュニティにもつながるが、自身が勤務する附属幼稚園で、ミドルリーダーとして何ができるのか。教職大学院には、同じような立場の先生が多く、研究主任としてどうすべきか、実践やその中での喜びや苦悩など分かち合うことで、次への取り組みやアイデアなどにもつながっていくきっかけになり、またミドルリーダーとしての自覚を強めたことにつながったと考える。同じような立場の先生と異校種でも語り合えることはとても大きく、また異校種だからこそ参考にもなるし、刺激を受けることができたと考える。

4 長期実践を書き終えて

教職大学院の先生方のご協力でなんとか長期実践報告を書き終えることができた。長期実践報告を書きながら、幼児教育を目指したきっかけ、自分がどのように幼児教育と向き合ってきたのか、その当時の思いと今の考えを照らし合わせながら、振り返ることができた。そして、今までは自分というものを探しながら、目の前の子供たちのために、幼児教育の中で成果をあげるために、必死に自分と向き合い試行錯誤してきたことがわかった。その上で、次はもっと広い視野で、周囲を巻き込みながら、幼児教育を盛り上げていく必要性を改めて実感をした。

5 今後の展望

行きたくてもなかなか行けなかった教職大学院。様々なご縁やご協力のもと、教職大学院で学ばせていただく機会を与えてもらったことはとても幸せであった。それを恩返しするというには力不足かもしれないが、これからは、実践と理論を往還しながら、日々の自分自身の保育や考え方を更新し続け、幼児教育というものを追求していきたいと考えている。また、どのような形かわからないが、一緒に学びあえるコミュニティを構築しながら、福井の幼児教育に自分なりに寄与し、幼児教育を盛り上げていけるような一員になっていきたいと考える。

2年間の教職大学院の学びを振り返って

福井大学教育学部附属義務教育学校 坂部 宏明

これまでの私の教職人生において、教職大学院について、存在は知っていたものの、自分自身には遠いもので、その教職大学院で学ぶことなど想像もしていませんでした。そんな教職大学院で学ぼうと考えることができたきっかけは、現任校である福井大学教育学部附属義務教育学校（以下、附属）に赴任することができたことです。現任校には、たくさんの先生方がこの教職大学院で学ばれており、その魅力について直接聴くことはありませんでしたが、その先生方の実践や言動は、とても説得力のあるもので、これまで附属が取り組んできたことにストーリー性があり、「なるほど」と思うことがたくさんありました。そんな中、ある先生からの、「理論に裏打ちされた実践には説得力がある。教職大学院では、そのことが学べる。」という言葉で、この教職大学院を志すこととなりました。

教職大学院の入学試験。そのときの試験問題の中で提示された資料「中央教育審議会2012年8月答申」の中に、「学び続ける教師」という言葉があり、そのことについて考えを論じたことを思い出します。そのことを思い返すと、その時が「学び続ける教師」として新たな学びへと踏み出した瞬間であったのだと捉えられます。

教職大学院での2年間は、これまで経験し培ってきた教師としての視野をさらに広いものとするのができたと感じています。たくさんある学びの中で、まず初めに挙げるとするなら、附属の諸先輩方の実践記録をじっくりと読み解く機会をいただけたことです。それらたくさんの実践記録は、子どもの学びの筋に沿ったストーリー性のある実践で、これまで附属が大切に続け、今に至るまで伝承されてきた「探究するコミュニティ」の考え方が大変明確なものとなりました。

次に、「コミュニティ・オブ・プラクティス」や「学習する組織」などの理論書を読み解いたことです。特に、「コミュニティ・オブ・プラクティス」には、学校現場に当てはまる事例がたくさんあり、私自身の周りで組成されている様々な形のコミュニティを分析的に見ることができるようになりました。本書の中には、「コミュニティの周辺にベンチを設ける」という一節があります。コミュニティに積極的に関わろうとしない者でも、コミュニティの取り組みの様子を見たり聞いたりすることを奨励することです。この考え方は、私自身の考えを柔軟なもの

に変えるきっかけになりました。この一節に出会う前までは、学校組織に所属するメンバー全員が同じ目標に向かって全員が積極的に取り組んでいくべきだと考えていました。取り組みにネガティブなメンバーに対して憤りを抱いたこともありましたが、しかし、学校組織全員が同じ方向を向いて積極的に取り組めることは理想です。それは、非常に難しいことだと捉えて、できるだけたくさんのメンバーを巻き込み、わくわくするような取り組みを続けていくことこそが重要であると学ぶことができました。

また、様々な現場で実際に取り組まれている実践を語り合った合同カンファレンスやラウンドテーブルでは、先生方一人一人がチャレンジしてきたことや、うまくいなくて悩んでいることを生の声で聴くことができました。たくさんの実践を聴き合い、そのことについて価値づけし合ったり、アドバイスをし合ったりすることができたことは、私自身の実践に活かすことのできるものとなり、勇気や励ましを与えていただくものとなりました。

そして、何よりも大きな学びとなったのは長期実践研究報告を書き記すことです。この附属での研究企画（研究部）、国語科部会リーダー、国語科授業実践者として三つの視点で3年間の取り組みを省察してきました。私自身の附属でチャレンジしてきたことや、実践を進める中で表れた課題や葛藤をできるだけ鮮明に事細かに書き記しました。この3年間の省察したことで、その時に感じていたことと、執筆時に振り返ったことを同時に捉え返すことができ、私自身がたどってきたことが意味のあるものと感じることができました。さらに、私が附属で取り組んできたことを下支えしているのは、私のこれまでの教師経験であり、その経験が現在につながっているのだということも捉えることができ、18年間の私の教師人生を振り返る機会となりました。

この教職大学院での2年間の学びを書き綴ってきました。たった2年間でしたが、3年間の附属での学びだけでなく、18年間の教師人生の学びを呼び起こすことができた大変な有意義なもので素敵な時間となりました。この2年間の学びを、私自身の実践を高めていくだけでなく、私自身の学びをたくさんの仲間伝えていって、新型コロナウイルス感染拡大のような未曾有の事態を乗り越え、そのことすらも追い風に変えていけるような「学び続ける教師

集団」の一員として、より良い学校教育を探究し続けていく存在でありたいです。

ラウンドテーブル・合同カンファレンスでの学び

北陸高等学校 中嶋 旬子

大学院で学び始めたばかりの頃は、自身の取り組みを話し、職種も年代も違う先生方の実践を聴くことが、どのように自分の学びに繋がるのかわからなかった。お話を伺う先生方の実践から、自分の実践にすぐにでも活かせるような手がかりを求めている。対話よりもむしろ、素晴らしい教授法や上手くいく技法を教えてもらえるような講義スタイルを望んでさえいた。

しかし、その考えは違っていた。ラウンドテーブルや合同カンファレンスでは、挑戦していることや、失敗したこと、上手くいったこと、モヤモヤしていることや分からないことを語り合う。それぞれの迷いや不安、時には不満を真剣に聴き、励まし合い、悩みや葛藤を共有する。自身の実践をふりかえり、見つめ直し、気づきがあり、また新たにアイデアや疑問が浮かんでくる。教職大学院でのそれらの経験によって、自分自身をメタ認知し、考えを整理し、さらなる次の挑戦に向かうことができた。

学びの深まりには、実践の歩みを問い直そうとする語り手と、その展開から学び取ろうとする聴き手が集う場が必要である。他者の多様な意見は自身の考えを広げたり、深めたり、見直したりするきっかけになる。キャリアや教科を越えて教師が語り合い、それぞれのよさを知ることが、教師としての成長において相乗効果を生み出す。それぞれの想いや不安、疑問に思っていることを率直に語りあうことでお互いを認め、成長し合うことができる。

感じていることを率直に表現でき、自己と他者を尊重できる関係を築くことは教師にも生徒にも求められている。生徒の希望進路や学校の伝統文化をふまえて「これからの学校」について話し合い、それを具体的行動へとつなげる際にはできるだけ多様な意見に耳を傾け合うことが必要である。若い先生もベテランもすべての先生が「これからの学校はどんな存在でありたいのか」「学校には何が求められているのか」「教科や学年としての指導のありかた」など自由に語り合い、お互いの強みや弱みを安心して打ち明け合えるような関係を作り、教師のチーム

力を高められるような研修や場が必要である。そのためには自分の意識改革はもちろんだが、まわりの教員の意識改革も必要である。様々な個性を持った教師をつなげることもミドルリーダーとしての役割であると考え。教科や学年、校務分掌を超えた多角的なアプローチで学校として全員が大切にすべきことを考え、語り合えるようになるように、学校全体を巻き込んで、生徒だけでなく教師も学び、成長できる雰囲気在校内に育みたい。

対話を重ねても教師の考えや想いを合わせるのに時間はかかる。短時間でできるようなものでもなし、ヴィジョンを言語化し、共有したからといってすぐに変化が見られ、成果が出たりするとは限らない。話し合いの結果は自分が望んだものでなくても、結論に至る過程で自分の意見に耳を傾けてもらえれば、それまでの話し合いは無駄ではない。自由な対話によって生まれた意見を拾い上げ、合意形成に反映していくことができれば、「これからも話し合おう」と、自分のいる組織の未来に希望を見いだせるはずである。学校のシステムや構造に問題があったとしても、全てをそのせいにしては前に進まない。「何を学ぶか」ではなく、「どのように学ぶか」という視点に立ち、知識をどう活用したらよいか、自分が何をすべきかを自分で決定する力を身につけていくというヴィジョンを持ち、生徒と共に成長できる教師でありたい。自分だけでも前進しようとする姿勢が、生徒たちだけでなく、他の教員にも火をつけると思う。変化の土壌は確実に育まれていると信じて一步一步進んでいくことが学校改革へとつながっていく。

大学院で学んでいく中で、私自身が「答えのない問い」に立ち向かい、自分を変え、改善し、実践したり語ったりすることに意味があると気づいた。教師自身が学習者としての視点を持ち、生徒と共に苦しみながら、もがきながら歩んでいかなければならない。これまで以上に教師にも学び続けることが求められている。日々進化していくために、省察を欠

かさず、それらを経験に落とし込み、思考や活動を改善していく試行錯誤の積み重ねを大切にしていきたい。皆が当事者意識を持って新しい時代に向けた

授業改善をおこない、自分の考えや想いを自由に言い合える場をつくり、学校全体が活性化するように力を尽くしていきたい。

Learning Points from DPDT and Applying Some at the Yangon University of Education

Affiliated Schools, Compulsory Education School Naing Win Soe

I am a teacher at the Yangon University of Education, Myanmar. I was taking a middle leader management course at DPDT, the University of Fukui. As I believe that the growth of a teacher's professionalism causes student learning vibrant, I keep an open mind for my professional development with the intention of student learning achievement and receive learning points from anyone: the younger or the older. As a part of the course, while staying at Fuzoku, I observed the lessons in Fuzoku and studied school management, student learning styles, and professional development of the teachers there. My main focus was on the reflective lesson study of the school and the lessons designed for the inquiry approach. I have learned that the thoughtful dialogues of the teachers helped improve the school management and student learning (deep learning and active learning) by bettering the lessons through reflection-in and on the action, collaborating with the colleagues. The inquiry approach and collaborative learning mostly designed the lessons in Fuzoku. English lessons were also designed with the inquiry approach and communicative language approaches, especially CLIL (content and language integrated learning). The teachers were applying the inquiry design proposed by DPDT, the University of Fukui. Thus, the theory from the university was being implemented in the practice of the lessons in the school. To sustain the balance of theory and practice, the student teachers as interns were put in the school to see the lessons and collaborate with the teachers (mentors) to close the gap in teaching and generations: young and old teachers. By participating in the lesson study meeting and observing the open lessons in the school, I have learned that a reflective lesson study is an excellent tool for the professional development of the teachers, curriculum management, and school development. The teachers got involved in various communities of professional development and research work.

I also had an opportunity to learn from the students during the lessons and the activities they conducted for their integrated projects. I have learned that the students were energetic in the discussions of the projects in which I could see the learning pattern and development of the inquiry design. The students could clarify what the school was doing and how the teachers were implementing to succeed. Additionally, they could explain why they were learning and how they were conducting in each activity designed for the inquiry approach. The students were authorized for their learning and took responsibility for the results. Then, the students (like the teachers) also participated in different communities with the intention of their learning achievement and training of leadership skills for their future society. Besides, student agency and teacher agency are the critical terms for the teachers and the students to grow in their communities since the school is implementing the criteria laid down by OECD.

At the intensive courses, I had an opportunity to learn the theory behind the practices of the school. The classes were also designed for the inquiry approach in which continuous learning development took place with reflective dialogues with teachers of different ages. The recommended books were proposed to the teachers who could choose the books or reflective practice records in relation to their practices at the school. The teachers could find the meaning and concepts of the educational reforms, of the inquiry approach, of the collaborative learning, of how to cultivate communities of practice and learning organizations by progressively reading the theories and the reflective practices and steadily talking with each other of the practices at the schools. The similar pattern of the inquiry design could be seen in the lessons of the teachers, the reflective lesson study for the teachers' professional development, the activities and the projects of the students learning design of student learning and the

roundtable discussions, the intensive courses, and the monthly meetings of DPDT.

In Myanmar, I will cultivate communities of practice at the University of Education. I also intent to collaborate with teachers at schools. The lessons will be designed for the inquiry approach and collaborative learning by giving the students learning opportunities and responsibilities. The teaching practice of the student teachers at schools will be modified by designing roundtable discussions that include reflective dialogues.

Then, the collaboration with the teachers at schools will be increased by taking advantage of the teaching practice of the student teachers.

Furthermore, the training of in-service teachers will be altered with the inquiry design. The collaboration with the teachers will be commenced, and the reflective lesson study will be introduced in the schools by starting with the lessons of English. The communities will be cultivated by the practice of lesson study in the schools in association with pre and in-service teachers training.

連合教職大学院での学び

3月に卒業生を送り出し、この春からは久しぶりの一年生の担任をすることになった。今日は2020年(令和2年)4月10日である。市立札幌大通高等学校では、新入生のオリエンテーション期間初日を迎えている。多くの新入生が不安と期待が入り混じった表情を浮かべている。

新型コロナウイルスの対応で教育現場も混乱している。情報が錯綜し、国や行政からの指示も二転三転する中で、我々教師はこれまでにない対応を求められている。生徒たちの安心安全を守ることを第一に考え行動しなければならない。

授業計画を立てようにも、グループワークやディスカッションは禁止、課外学習自粛など、これまで積極的に教育活動に取り入れてきたことが実施できない状況である。さらに、今後感染者の増加によっては休業措置をとることになる。先行きが見えない不安な状況が続くことになる。

このような状況下において、我々はこれまで以上に冷静に物事を考えていかなければならない。今現在できることは何であるか。そして、少し先を見据えた準備を組織で進めていかなければならないと感じている。そのためには、目的と手段の関係性を的確に捉え、判断や行動の基準を導き出さなければならない。

大学院就学以前よりもこうした思考を働かせるようになった。2年間の学びが生かされていると感じることができる。まさか大学院が修了してすぐにこのような社会状況になるとは想像もしていなかった。

大学院で学んだことは、一部の課題を解決するような知識や技術でも、流行りの授業方法でも、「こ

札幌市立札幌大通高等学校 西野 功泰

うあるべき」というような教師や組織のあり方でもない。いつの時代にも役立つであろう思考や判断、物事の表現方法、常に変化を乗り越えていくための構えをつくることであったと、今の混乱した状況の中で改めて実感している。

大学院で学び、長期実践研究報告書(以下、「長期実践」とする。)を書くことは、自分の教師としての北極星を捉え直す機会となった。北極星とは、自分の中に存在する揺るがない軸である。私自身が教師として働く目的や意味を改めて見つめ直すことができた。なぜ連合教職大学院で学ぶ必要があったのか。それは、教師として仕事の価値を言語化し、取り組んできた実践を構造化することにあっただろうか。そして、「今後どのような教師でありたいか」という問いに真摯に向き合う時間だった。

北極星を見つけ出す方法は、全国から集まった実践者や研究者と対話を重ねることだった。教育者(学校改革者)や研究者と書籍を通じて対話を重ねることだった。自分と向き合い、長期実践を書くことだった。書きながら言葉を探ることだった。そして、考えることだった。

北極星は自分一人では到底見つけ出すことはできなかっただろう。見つけ出すために、助言者である鮫島先生は本気で手を貸してくださった。答えを示すのではなく、自分で見つけ出すことをひたすら待ち続けてくれたのだ。信じてくれたのだ。見つけ出すのに長く苦しい時間を費やした。古い自分との戦いは容易ではなかった。三十数年間の思考が染みついていた。完全に自分を俯瞰して見つめ直すことは難しかった。先が見えずに挫折しそうにもなった。

そんな時、「必ず港にたどり着ける」と鮫島先生が言ってくれた。心強かった。私も知っていた。やり抜きたかった。

私の「北極星」は、いつもそこにあった。北極星を見つけるとは、私自身のものの見方、考え方、捉え方「思考の習慣」を変えることだった。大学院は修了してしまったが、学びが終わったわけでも、研究が終了したわけでもない。力がついたというよりは、自分の力の無さに気がつくことができた。気がついて終わりではない。気がついた時にどのような行動を起こすかが重要である。

変化の激しいこの時代、現在取り組んでいる実践もすぐに劣化してしまうだろう。根本から覆される

ことも起こるに違いない。その時々には耐えられる力、思考、判断能力を鍛えていきたい。今後も自らの実践を積み重ね、理論化し体系化していきたい。そして、自分の実践が生徒や社会のためにどのように役立つのかを考え、考えるだけではなく、それらをかたちにできる教師でありたいと考えている。

今こうして教師としての再出発ができることを本当にありがたく思います。2年間の大学院生活を支え、励ましてくださったすべての皆さまに心から感謝申し上げます。ありがとうございました。またお会いできることを楽しみにしております。

広がる学びの輪

さくら認定こども園 西谷 知恵

「どんなことを勉強するんだろう。」「新しい知識を入れて、園に持ち帰らないと。」「私にも長期実践記録が書けるのだろうか…。」そんな思いを持って入学した2年前、こうして今、最終カンファレンス代替措置として、ニュースレター原稿を書くことになるとは、誰もが予想しなかったことでしょう。

予測不可能な社会を生き抜くために、子どもたちに育みたい力、それを支える教育の役割を考えてきたこれまででしたが、まさしく今、その真っ只中にいると感じる日々です。子どもたち一人一人が考え、最善を尽くそうと動くことができるのだろうか。それは私たち大人、さらには教育者もそうで、何ができるのか、何をしなければならないのか、何を子どもたちに伝えたらいいのか、一人一人の考える力が問われています。余裕がなくなり、目先の利得にとらわれてしまっただけでは、本質を見失い、自身が持つ知識や経験を活かせなくなってしまう。本当に大切なことは、もっと別なところにあることを、今の社会は教えてくれているようです。

これは、大学院での学びに似ていたなと思います。入学当初の、利得となる知識ばかりを求めようとしていた自分が、少しずつ、様々な校種、年齢、立場の先生方と共に学ぶ時間に、意義を見出す自分に変わっていきました。学校とは、知識ばかりを学ぶところではないことに、自らの経験と実践の振り返りの中で気づいていくことができました。

そこには多くの人との出会いがあり、人と人とのつながりのなかでしか学べないことがあります。大学院においても、カンファレンスやラウンドテーブル、長期実践研究報告書を通して出会った人々とのつながりが、私の世界を広げ、学びをつくっていきました。

私事ですが、2020年4月9日、予期せぬ病を抱えて産まれることとなった我が子が、生死に関わる日々を懸命に生き抜いてくれています。この子には、この先何度と続く命懸けの心臓手術や、園や学校で生まれる物語、心打たれる友達や先生方との出会いなど、まだ想像もできない人生が待っていることでしょう。

お腹の中にいるときから、たくさんの医療スタッフの方々に診ていただき、救いの手を差し伸べられてきた子どもです。親の私が気持ちを前に向けられないときも、現場の先生方は決して希望を捨てず、この子の生きる力を信じ、小さな命と向き合い続けてくれました。

繰り返される検査と議論のなか、私はというと、教育者としての志を奮い立たされる思いでした。どんなに厳しい条件下でも、周産期科、小児内科、循環器科、外科、集中治療スタッフなど、それぞれの専門家が何度も話し合いを繰り返し、チームが一丸となって、その子にとってよりよい手立てを考えていく。職種は違えど、未来を生きる子どもたちと関

わる、その志は同じである、同じでなければならぬと教えられました。

子どもを育むとは、その子に関わる全ての大人が手を取り合ってこそなせるのだと、痛感しています。教育現場を離れ、先生と呼ばれる立場ではなくなる私ですが、子どもを育てる大人の一人であることに、変わりはありません。そしてまたいつか、教育の世界に戻りたい。そう思えるのは、大学院を通し、子どもたちとの実践を振り返り、学び続ける楽しさ、おもしろさを知ってしまったからかもしれません。または、続く学びの過程で、きらきら輝く素敵な先生方との出会いがあり、「私もいつかこんな先生になりたい!」という憧れが高まっていったからかもしれません。

教育現場を通して子どもを取り巻く、多くの大人たちが出会い、共に学び、更なる教育の世界を広げていく。大学院は、そんな場所であり続け、尚且つ時代の変化に合わせ、進化していくのだと思います。この場所から生まれた学びの輪が、今後益々広がっていくことを期待しています。

最後に、私と出会い、つながり、いまの自分をつくってくれた全ての方に感謝致します。素晴らしい場所へと送り出してくださった、さくら認定こども園の伊藤康弘園長先生、仁美教頭先生に、心よりお礼申し上げます。

2年間の学びをふりかえって

認定こども園 福井佼成幼稚園 松田 知峰

「別に私でなくていいのに…」と大きなプレッシャーを背負い、園の代表として教職大学院に入学した2年前。当時、我が園は“子ども主体の保育”を目指して改革に乗り出し、3年目を迎えていました。見栄え重視で子ども達の発達に沿わないこれまでの保育を根底から見直し、「保育は何のため、誰のためにあるべきか」と私たち保育者の意識改革も伴い、試行錯誤しながら取り組む毎日でした。この改革とともに教職大学院とのご縁ができ、多くの先生たちとの語り合い、取り組みや課題を投げかけていくうち、「自分の見つめていた世界がどれほど狭かったか」「やはりわが園は改革が必要だったのだ」と改めて思い知りました。時代は常に流れ、社会状況も変化し続けている中、教育も保育も前に進む必要性を学び、常に「どうして?」という“疑問”、「知りたい!」という“探求心”を持ち続ける大切さを学んだ2年間でした。

さて…その保育改革のスタートは、園長や主幹たちの投げかけによって行われた“保育室からの玩具の撤去”でした。それまで、子どもに玩具を選ぶ権利はなく、保育室に置かれているもので遊ぶのが常であり、それがマンネリ化していることすら私たち保育者の意識にはありませんでした。私たちは「子ども達に馴染みのある玩具を、なぜ取り除くのか」「その都度、部屋に運び込む手間がかかるではないか?」と戸惑いました。しかし、おもちゃ置き場に集められた中から子どもの意思で選択することで、「どれにする?」「ぼくはこれがいいな」と、子ど

も達の対話が生まれたり、自分の意思をしっかりと発信したり、さらにはみんなで考えて決める姿が見られるようになったのです。繰り返していくうち、今までと同じ玩具でありながら、自分たちで選んだ喜びから、より創造的に遊ぶ姿が多くみられるようになり、そのような子ども達の意識の変化は、私たち保育者の意識をも大きく変えてくれました。子ども達が自分たちの発想で遊ぶいきいきとした様子を見て、環境の与える影響の強さを感じると同時に、子ども達の遊ぶ力の向上を実感することができ、私たちが初めに抱いた戸惑いは、子ども達のありのままの姿によって消え去り、「子ども達をもっと知ろう」という意欲もどんどん高まっていきました。

次に挑んだのは、“遊びこみ”(導入当時は、行事のない日の登園後から11:30まで自由に遊ぶ時間を保障していた)です。私たちは「そんな長い時間、きつと遊びも途切れるに違いない」と思っていました。子ども達は、中断することなく好きな遊びに没頭し、一人の子が思いのまま始めた遊びに一人二人と寄ってきては、どんどん広がりが見られました。「何でこうなるのかな?」「今度はこうしてみようよ」…みんなで対話する中で面白いアイデアが生まれ、「そんなことしちゃダメだって」「どうして?僕はこっちがいいの!」と、みんなの思いが交錯したかと思えば、「すごいな、〇〇くん!僕もやってみよう!」と賛同し、面白い会話が繰り返されていました。また、子ども達が試行錯誤する傍らで、保育者がさりげない仕掛けを投じることで遊びは想

像を越え、私たちまで魅了されていきました。この繰り返しのうちに、豊かな感性や学びが見え、日々の遊びに新鮮ささえ感じるようになりました。

子ども一人ひとりが思いをもち、その場所や素材に全力で向かって遊んだあとは、ふりかえりを重ねてきました。当初は、ただ話を聞くだけの報告会的なものでしたが、“遊びで得た充実感”と“ふりかえりでの溢れる気持ち”は比例し、子どもの気持ちは大きな意欲とともに次へと向かっているのだと、今は感じとれるようになりました。大人にとっては何気ない繰り返しでも、子どもにとっては育ちの積み重ねであり、「次なるジャンプのための力の充実なのだ」と私自身の大きな学びとなりました。

この保育改革はまだまだ進み続けますが、私たち保育者は子ども達の成長の姿から力をもらい、同僚たちと共有・共感することで自分の学びを得ていると実感しています。保育者みんなの、空っぽだった

大きな引き出しの中には、子ども達からの発見・学び・感動、そして何より“子どもたちへの思い”が詰まり始めました。決して独り占めするのではなく、同僚たちといっしょに開けてのぞき、これからもみんなと一緒に使い続けたいと思います。

大学院では大勢の異校種の先生方と出会い、語り合い、さまざまな壁にぶつかりながらも、多くの実践と省察を積み重ねながら前に進んでいらっしゃる姿を見てきました。私にとって、ここまで自分のことを振り返り見つめなおすことができる場所はなく、かけがえのないものでした。たくさんの学びを与えてくださった先生方に心からお礼を申し上げます。この学びを宝物にして、これからも保育者として前を向いて進んでいきたいと思っています。本当にありがとうございました。

修了生 学校改革マネジメントコース

2年間をふり返って

小浜市立小浜小学校 小坂 恵

心の準備ができていないまま始まった臨時休業。無人の校庭を職員室から眺め、子どもの声がたえず聞こえた日常のありがたみを感じるこの頃です。また、直接、顔を合わせ、対話を重ねるという大学院のカンファレンスが、いかに贅沢なものであったか再確認させられているところです。大学院スタッフ、院生の皆様におかれましても、イレギュラーへの対応が続いておられるのではないのでしょうか。

さて、この2年間、私は「同僚性の向上」をキーワードに実践を進めてきました。その中で最も手応えを感じたのが、みんながかりで取り組んだ「学校行事の見直し」です。子どもの姿を中心に自校の強みを語り、課題を洗い出しました。そこからつけたい力を「主体性」と定め、このキーワードに即して学校行事の継続・廃止・改善を検討しました。「子どもについて」「学校について」語るとき、どの先生も一言もっておられました。若手も、今年度赴任された方ももれなく！

自校の子どもにどんな力をつけたいのか、どんな子どもを育てたいのか、めざす姿にせまるにはどんな教育課程（学校行事も含めたカリキュラム）が望ましいのか、その時間を捻出するために何を削って何を重点化するのか、社会ではどのような力が求められているのか語り合うことは、喧々とした対立ではなく、実に楽しい知恵の出し合いでした。

みんな忙しいから対話の時間は持てないだろうという決めつけ。意見の違いが顕在化すると、事が進みにくくなるのではないかという不安。文科省や県から示される課題に向かってとにかく進むことが正しいという安直さ。これまでは、そういった自分の思い込み、弱さが同僚性の構築を阻んでいましたが、学校行事の見直しを全員参加で行ったことで考えが大きく変わりました。小浜市教育委員会教育長が以前、「学校組織にレギュラーはいても補欠はいない」と話して下さったことがありましたが、その言葉を実感し、同僚と課題を共有することで得られる推進力を体感できました。

このようなチャレンジができましたのは、自校の管理職の理解、同僚の協力が得られたおかげですが、「学校改革マネジメントコース」という学びの舞台が用意されていたことも大きいと感じます。実践をカンファレンスで報告すると、「それは何のためにしたのか」「周囲の反応はどうであったか」「何が得られたのか」等の温かい関心と質問が寄せられ、問いに答えようとするのが省察につながりました。

この大学院で、志高く、刺激を与えてくれる魅力的な仲間と出会えたことは、私の財産であり、本当にうれしく思っています。

これから、子どもも職員も所属意識をもち、それぞれの持ち味を発揮できる学校づくりに一層努力していきたいと思います。また皆様とどこかで出会えることを楽しみにして。

再出発へ向けて

福井県嶺南教育事務所 田結 清高

長期実践研究報告とニュースレター原稿を1月末に提出した。2年に渡る嶺南教育事務所（以下事務所）における実践と学びの振り返りについては、これらの中に記してあるので、そちらも併せてお読みいただくとありがたい。今回は、私の研究の大きな柱である「組織における協働」について取り組んだ「嶺南教育実践フォーラム（以下フォーラム）」におけるその後の展開について簡単に紹介させていただこうと思う。

2月13日木曜日。嶺南教育実践フォーラム（以下フォーラム）が開催された。今回は、ポスター・セッション5発表、セッション1～3に11発表、ナレッジ・フェアに3機関という内容での実施であった。当日は180名を超える参加者を得、盛会のうちに幕を閉じることができた。参加者、関係者の皆様には、紙面をお借りして感謝申し上げたい。

今年度取り入れたポスター・セッションとナレッジ・フェアは、一つ一つの発表のクオリティが高く、参加者の満足度は非常に高かった。聞きやすさを優先した会場設定にも好感を持ってもらえたようである。ポスター・セッションは時間の設定上、1発表しか聞くことができず、複数の発表を聞きたかったという感想が多かった。また、1発表への参加人数が多過ぎて、ポスターが見づらかったり、声が聞きづらかったりという問題も発生した。発表数を増やしたり、発表回数を増やしたりして、参加人数を分散することが参加者のニーズに応えることにつながる。

ナレッジ・フェアは今回初めての実施であったが、招致した各機関は場慣れしており、非常にアピールが巧みであった。プレゼンテーション力という観点からも参考になることが多かった。各機関の参加ニーズは予想以上に高く、今後の継続に確かな手応え

を感じることができた。機関数の調整や嶺北の機関への勧誘など工夫の余地は多い。また、この時間を利用してポスターや研修講座の報告等の掲示物を見てもらい、参加者が主体的に学んだり交流したりできる場の創出を目指したい。

フォーラムには県外からの参加もいただいている。嶺南の教員と県外の教員との交流は相互により刺激と影響を与え合っている。それは、地域の殻に閉じこもらない視点の広がりが見られるということである。多様性を知ることにより、改めて自分自身の姿を見つめ直すことが可能になる。さらには、嶺南の教育を発信し好意的に受け取ってもらえることで、嶺南の教員のステータスや自信の向上にもつながっている。とても貴重な存在なのである。

ところで、私の中では、「フォーラムは新たなフェーズに入った。」との実感がある。これまでは、所内協働の一つの象徴として、「所内に対する見える化」を重要な課題として取り組んできた。この2年間の実践により所内への浸透は進み、所員全員が自分事として関わってもらえるフォーラムになってきた。そのため、所員の関心は、「どのように運営するか」から「この場を活用して何をどのように発信していくのか」へと移ってきた。つまり、「所外に対する見える化」が重要な課題として認識されてきたのである。この点については、2月に実施した協働研究会においてもすでに話題に上っており、所員それぞれの立場において次年度に向けた取り組みがイメージされつつある。担当者としては非常に心強い限りである。3月実施の協働研究会において協働研究会自体の振り返りを行った。その議事録の中に大変うれしい記述があったので最後に紹介して終わりたい。それは、「次年度につながる貴重な意見交流ができました。協働研究会が何でも言える、そ

してホッとできる場になるとともに、さらに有意義な会になってきていると感じました。」というものである。協働研究会で取り組んできたことが、所員の皆様の心に確かな形で伝わっていた。それが感じられるこの瞬間ほど、うれしいことはない。これこそ、私が目指してきた組織文化の継承なのではないだろうか。

今回の異動で、嶺南教育事務所研修課から本庁の教職員課(旧学校振興課)へ転任することとなった。

教職大学院での学びを学校現場へ持ち帰って実践することを想定してきた私にとって青天の霹靂であり、正直なかなか心の整理がつかない現状である。しかし、新しい職場においても真の協働を探究し、互いの力を最大限発揮できるよう配慮しながら、与えられた職責を全うしていこうと思う。この2年間の学びに関わっていただいたすべての方に感謝申し上げ、再出発の挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございました。

在学生 授業研究・教職開発専門性コース

言葉と行動を繋げ、動く存在になるために

福井市至民中学校 黒田 苑

先日の2月のラウンドテーブルの報告会において、グループの先生方に「M2の学びに向けてどんなことができるか」と問題提起しました。私が先生方との協議の中で学んだのは、「今は大事な訓練の期間だ」ということです。

新型コロナウイルスの影響もあり、2019年度の3月は、ほとんど授業を参観したり記録したりすることができませんでした。しかし、この「ピンチ」によって、1年のまとめを書き、長期実践報告に向けての学びの方向性を考える「チャンス」ができました。生徒たちと休校中の過ごし方を語り合ったのがとても遠くに感じるくらい、大学で毎日進めました。1年のまとめを書き進めた1ヶ月を振り返り、この1年間は言葉と行動をうまく繋げることができなかつたと痛感しています。

その上で、今の私に必要なことは、この「訓練のメニュー」をデザインしていくことだと思いました。3月に小林真由美校長先生と2020年度の研究主題を向けた取り組みについて相談しました。2019年度は学級にいながらも学年で動いていることで、生徒との関わり方にバラつきが出た点を省みました。多様な生徒に向き合うためには、どの生徒にも同じように見える条件が必要だと感じました。このまま学年を持ち上げらず、新しい学年での関わりづくりを希望しました。

インターンシップを週2日に変え、1日ごとに学級を替えて研修することに挑戦します。日替わりで巡回した学級では、国語を中心に授業を参観し、生徒の姿の捉え方を学びます。日々の学びを通して、多様な個を見つめ、個に対する関わり・個と個が関わる支援に繋げていきたいです。

次の授業実践はいつになるかは分かりません。新型コロナウイルスの感染が拡大すれば、「訓練の訓練」の期間が長くなります。それでも、授業者としての力量を高めていくことも含め、この1年の学びを生かしていきたいと思います。この1年の学びを通して、生徒にとって面白い授業は、生徒の自己関連性が高い学習を見通し、言葉の見方・考え方の多様性と生徒の自己表現の多様性が必要だと感じました。生徒のためのファシリテート力(発問・切り返し)を培い、これからも積み重ねた学びを生きたものにしていきたいです。

修了生の先生方、ご卒業おめでとうございます。先生方とは、合同カンファレンスや集中講義で1年間お世話になりました。学校現場をほとんど知らない私でしたが、先生方のお話から教職大学院での学びが広がりました。「学校を知る」「教職を知る」たくさんの機会をくださり、ありがとうございました。

この一年間がない人生なら、そんな人生 いらないと思えるほど

福井市市民中学校 清水 広平

迷いに迷って、つまずくだけつまずいた。それだけ、教員の立場に立って生徒と関わることは、難しかった。それでも、一度もインターンシップを休みたと思うことがなかった。授業実践や学級指導を任せてもらうことで、生徒への信頼感も少しずつ高まっていった。実現こそしなかったが、それは3月に計画していた授業の中で如実に現れていた。授業計画をしながら、生徒たちの顔が浮かび、その度に「あの子らなら、この難しい課題でもきっと協働して答えを導き出せるはずだ」と思えた。入学当初は、長期間の中で生徒との関係性を築くことを一つの大きな目標としており、学校のことを考えると生徒たちの顔が浮かぶことに、いつしか高揚感を抱くようになった。

しかし、教師としての私を常に問い続けることで、様々なことにつまずいた。自分の生徒との関わり方を幾度となく自問した。時にはメンターの先生に生徒との関わり方について相談することもあった。生徒に、「先生って、先生というより俺らのお兄ちゃんみたいだね」と言われたとき、非常に複雑だった。入学当初に言葉として、教育実習時代の私を「大学生のお兄さん」と形容していたこともあり、それから脱却出来なかったことが私に重くのしかかってきた。しかし、メンターの先生は違う見方を伝えてくれた。この学校には、私のように生徒にとって「お兄ちゃん」って思える先生っているのかと。つまり、生徒にとって「お兄ちゃん」と思えるその関係性も、院生として生徒と関係性を築くことができた一つの

証なのではないかと、おっしゃっていただいた。信頼を置くメンターの先生の言葉は、私の心を軽くした。生徒との関わり方に問題があるのではないかとという自問の日々は、そのように現職の先生との関わりによって解消されていった。もし、研究者を養成する大学院に進学を決めていれば、教員の立場で悩むこともなかった。管理職の先生方や現職の先生方と、直接的に話し、先生方の考えなどを聞く機会もなかった。私は、公教育に関わっていきたい。その上で、先生方の下で悩み、時には先生方の経験を聞かせていただける機会は、何にも変えがたい貴重な経験であった。

これまでの歩みと実践を省察し、その連関性を模索する機会があり、そしてそれを語り合うことができるこの大学院での学びは、やはりとても魅力的である。来年度からは、二年目として学習を支え、共に学び合うコミュニティを目指しながら、実践を重ねていく。二年目も悩み、そしてつまずき続けていきたい。

最後に、ご卒業された修了生の皆さん、本当におめでとうございます。カンファレンス等で実践を語り合うことができ、貴重な経験をさせていただきました。直属の先輩方におきましては、多方面でご迷惑をこの一年間でお掛けしたことと思います。それでも、最後まで向き合い、議論して下さったこと、心から感謝しております。皆さんの御活躍を心からお祈りしております。ご卒業おめでとうございます。

1年を通して

福井市明新小学校 吉田 聖

この1年を通して私が学びたかったことは、子どもたちの成長というとても抽象的なものだったが、インターンという実践の場と大学院という話し合いの場を往還することで子どもたちの成長の中でもコミュニティという点に焦点を当てていくことができた。これは、私たち教職大学院のM1のコミュニティにも当てはめることができた。

入学してから最初にできるコミュニティとしてはインターン先の1年生のコミュニティの成長と私たち教職大学院M1の成長は同じものだと考える。今のM1のメンバーがいたからこそ、2年間をかけて学びたいことがコミュニティの変容と成長という具体的なものにできたように思える。

今のM1に会えたこと、今のインターン先に行けたこと全てが私にとって大事なことで、自分になか

った考え方や物の見方を学ぶことに繋がったと実感している。M1 の今の関係はコミュニティというものがどういうものでどう作っていくと良いのかに気付かせてくれた。

インターン先ではコミュニティの変容や成長をリアルタイムで見ていくことができた。また、先生方にも助言をいただきながら、自分らしく子どもたちに接することができたし、授業も行っていくことができた。たくさんの人に支えられながらこの1年を過ごすことができたように思える。それはインターン先の先生や教職大学院の先生方だけでなく、インターン先の子どもたち、M1 の仲間たちも入ってくる。すべてが私の成長というものに密接にかかわっていると考えている。

この考え方は、教員になってからも大切になってくると考えている。教員が必ずしも子どもたちに教えてあげる立場という考え方を持つてはいけない。教員も日々子どもたちから何かしら学んでいるはずだ。絶対に自分たちが子どもたちより上の立場なのだと考えてはいけない。子どもたちより長く生きているだけ、それだけなのだ。なんなら、長く生きている子どもたちの方が私より柔軟な思考を持っている。それを狭めるような授業をしてはいけない。それを私たちは子どもたちと授業を行っている中で学んでいるのではないかと、思い出させてもらっているのではないだろうか、そう考えるようになった。

2年目に向けて、これから何を学んでいきたいかここで少しまとめておこうと思う。

1年目ではコミュニティの変容を小学1年生の学級で見ていくことができた。2年目はそのまま持ち上がりで成長を見ていくこともありだと思っていたが、支援員の方々や担任、教務主任と話し合った結果、今の1年生を持ち上がりで見ていくと自分の学びより子どもたちへの支援の面が強くなってしまうのではないかと、それならクラス替えも行われ担任も変わる3年生に行くのも1つの手である。という結論に

至った。また、低学年から中学年が変わることでコミュニティにも変化が起こるのではないかと推測するため今のところは3年生に行きたい。しかし、今の1年生を2年間通して見ていくことも面白いのではないかと考えている。

教職大学院は来年度からまた新しい体制に変わる。私たちが今年度1年かけて慣れてきたこと知ってきたこととはまた違うものになっていくのだろう。その中でも、私たちM1が大切に育んできたもの、学んできたこと忘れず、もっとよりよいものにしていかなければいけない。それを行っていくと同時に、新しく入ってくる新M1と協力していかなければいけない。今年は私自身、教採も控えている。今年の教採は1番のチャンスがある年でもある。

インターンシップ、教職大学院での仲間との協力、新M1との関係づくり、教採とやることは盛りだくさんとなっている。しかし、どれも中途半端にはやりたくない。一つ一つのことを大切にするためにも優先順位をしっかりとつけて、どれも自分の納得のいくものにしていきたい。2年目が終わり、学位記伝達式では反省することはあっても後悔だけはしないようにしたい。自分の中に確かな学び経験をもって社会に出ていけるようにあと1年間を頑張っていきたいと考えている。

修了生へ

ご卒業おめでとうございます。先輩方にはたくさんのことを教えていただきました。時には優しく、時には厳しく的確なアドバイスをいただくことができて私自身の成長に繋がったように感じます。本当にありがとうございました。

この春からは社会人として頑張っていってほしいと思います。これまでの大学院での学びを忘れず、子どもたちのことを第一に考えて学校経営、学級経営をしていってください。

省察し語り合うことー2年間の学びを振り返るー

武生市立西小学校 玉村 香奈

■2年間の振り返って

大学院での学びも2年を終えた。私は小学校教員免許取得プログラムのため3年目がある。

2年目となった2019年度には、合同カンファレンスや授業研究・教職専門性開発コースの週間カンファレンスにおいてOECDのEducation2030に関

係する資料を何点か読む機会があった。その中で、「生徒エージェンシー」、つまり、「生徒は各々自分のラーニング・コンパス」を持って、「目的意識を働かせ、自分自身の責任を果たしながら、周囲の人々、事象、状況をより良くするために学んでいく」ことの必要性が述べられていた。さらに、そこには

「共同エージェンシー」が不可欠で、「仲間や教師、家族、そして、コミュニティに囲まれ、生徒がそれらの人々と交流をもち、そのひとたちによって生徒がウェルビーイングへと導かれる」ことが必要であった。

この2年間を振り返ると、1年目は、院生として手に持った「ラーニング・コンパス」が定まることなく激しく回りはじめ、進むべき道を失った。それは、講義や演習形式のような授業ではなく、省察しひたすら語り合うという学びのスタイルが、当初思い描いていた学びのスタイルとは異なったためである。そのため、このような学びのあり方をなかなか受け入れられず、また、自分の年齢や経歴がここでは劣等感ともなり、大学院での居場所がなく所属意識もなくなっていった。

2年目は、小学校教員免許取得のために学部 of 授業を受けたり、課題レポートを書いたりする時間が増え、教科等について学ぶ機会が増えた。また、並行して行っていた実習では現場の先生方の姿から、今まであまり意識していなかった、“子どもたち同士”の対話的な学びの重要性を強く感じるようになった。そして、越前市内で立ち上げた外国につながる子どものための学習支援教室では、立ち上げ当初は個別学習（主に宿題サポート）を中心に行っていたが、2020年1月からはグループ学習も取り入れはじめた。それは他者から日本語を学ぶ機会や相互理解を深める機会を設けるとともに、他者と学ぶことで学習意欲を高めるためであった。学習支援教室のなかでは子ども同士の日本語や母語のレベル差が大きく、レベル差があれば交流することが難しい場面もあった。それは、ボランティアと子ども間も同様で、常に日本語が上位のボランティアが教える側となっていた。しかし、グループ学習では子ども同士だけでなく、子どもと大人も同じテーマで対話しながら学ぶ機会を作っていくことで互いの理解につながっていく様子が見られた。グループ学習を初めて2ヶ月目、学習を通して対話していくなかで、1年前から通っている中学3年生の学習者から「ここに来て

色々なことを学ぶことができてよかった」とはじめて言ってもらい、学習支援教室を続けてきてよかったと涙が出るほどうれしかった。当初なかなか受け入れることができなかった大学院での省察し語り合う学びのスタイルは、期せずして、グループ学習での学びのスタイルを考える上で参考となった。自分の話を傾聴してもらい、そして自分も傾聴するという他者との交流によって、“生徒がウェルビーイング”へと導かれていたのではないかと考える。

そして、この2年間を振り返り、大学院の居場所もなく孤軍奮闘していると思っていたが、実は私自身が仲間や大学院の先生方、実習先の先生方、実習先の児童や学習支援教室の学習者や保護者、家族、そして、コミュニティに囲まれ、交流をもつなかで、そのすべての方々が自分の学びをより良い方向へと導いてくれているということに気付くことができた。改めて、すべての方々に感謝するとともに、3年目の学びをより一層深めていきたい。

■今後の展望

3年目となる2020年度は、越前市で4年ぶりに外国籍児童の日本語指導に携わる。4年前の自分の日本語指導を振り返ると、反省すべき点が多い。新たな視点を持って、再度この職に戻ることで、4年前にできなかったことに挑戦していきたい。

■修了生へのメッセージ

2年間、共に語り合い、学び合うことができた院生のみなさまに深く感謝いたします。

みなさまのさらなるご活躍を心よりお祈り申し上げます。

■退職される松井富美恵先生、三田村彰先生、中島健先生へのメッセージ

我儘とっていいほどの私の想いに寄り添い、支えていただいたこと決して忘れません。

2年間本当にありがとうございました。

在学生 ミドルリーダー養成コース

1 年の学びを終えて・・・今思うこと

認定こども園 報徳幼稚園 竹澤 尚美

この4月より、連合教職大学院で学ばせていただくことになり、どのような学びをさせて頂こうか、どのような学びができるのか・・・不安な気持ちと期待が入り混じるような複雑な心境でスタートしたことを今でも鮮明に覚えています。

4月より、人とのかかわりに困難のある3歳児Y男を担当することになり、「人とのかかわりに困難のある幼児の育ちへの寄り添い」という自分の中のテーマを想定しながら、保育に当たってきました。どのようなかかわりがY男にとって、よりよい成長を促すのか、心の安定につながるのか・・・常に心の中に意識しながらかかわる中で、先生にご指導いただき、「自分で選んでいくようにする」をキーワードに、Y男が自分のやりたいことを選択できるようにして寄り添ってきました。また、行事においても、参加する場面、その合間の自由にしているときのY男への寄り添い方を自分の中で明確化し、声掛けを意識的に変えていくようにしました。11月頃から、行動が落ち着き、癇癪が減ってきたことは、Y男へのいろいろな人の寄り添い方があったからだと思っています。

3学期は、更に成長し、自分で意識して、クラスの子どもの動きを感じ取れるようになったり、癇癪を起した場合でも、保育室を飛び出していても、しばらくすると、自分から保育室に戻ってこれたりという姿が見られるようになりました。成長が著しく見られ、嬉しく思うとともに、丁寧なかかわりは、最も大事にしていけないといけない幼児と教師のあるべき姿なのだとつくづく感じました。

今後は、自分の現在の思いが創り上げられていった心境の変化に深く思いかえりながら、自分自身の教育観の移り変わりを時系列に沿ってもう一度まとめていきたいと思っています。自分に大きな影響を与えているものは何かを具体的に引き上げ、今までのまとめよりも、もう少し深く入り込みクローズアップしていきたいと思っています。そして、自分の思いの振り返りが今の自分の保育を見つめ直す機会となっ

たことで、具体的に幼児とのどのような関わり方が、培われてきた思いと被さる点があるのかを考察していきたいと思っています。

今年度は、様々な先生方との新しい出逢いがあり、その先生方とのかかわりが一番の大きな学びでありました。大学院にていろいろな先生の意見を頂戴し、知恵を頂き、こんなにも違った一人一人の思いがあることに気付かされました。幼児教育の世界を大きくとらえることができるようになったのも、小学校、中学校、特別支援学校、高校、そして、大学の先生方の様々な豊かな想いを聴きながら、それを一所懸命かみ砕きながら話を聞く姿勢がもてたことが起因しているように思われます。

人とのつながり、コミュニケーションは自分が成長できる最も、感謝に値するものだとつくづく感じました。子ども達のよりよい教育の場、生活の場を創り上げるのも、よりよい先生方の集まったコミュニティであるからこそではないかと思っています。

3月には別れがありますが、4月には、また新しい出逢いがあります。そのご縁に自分が積極的に心を開き、それぞれの先生方の思いを感じ、自分の想いを寄せていきながら、よりよい教育の在り方を見出していくとともに、想いを共有し、みんなで、一緒に悩みに想いを寄せ、智慧を出し合いながら、今後も学びを深めていきたいと思っています。諸先輩方の実践を読ませていただき、更に視野を広げていかせていただきます。いろいろセッションで熱心に耳を傾けてくださり、親切にいろいろなことを教えてくださりありがとうございました。

1年間、ご指導いただきました先生方、そして、グループセッションで一緒に話をさせて頂いた先生方に感謝いたします。来年度も、どうぞよろしくお願い致します。幼児教育における自分の子どもたちとの向き合い方においても、更に、いろいろな先生方の想いを聴かせていただきながら、先生方にご指導を賜りながら、今後も自分なりの実践を進めてまいりたいと思っています。

在学生 学校改革マネジメントコース

教職大学院 1年目の振り返り

さくら認定こども園 伊藤 康弘

私は、福井大学の近くのさくら認定こども園（以下「さくら」）の園長をしています。福井大学教職大学院の1年目の振り返りを書きます。私が職場で取り組んでいる「さくらをもっと素敵にプロジェクト」の1年目のまとめは、2月のラウンドテーブルのポスターセッション等で発表しましたので、今回は1年間の振り返りとして、数多くの先生方との対話から考えたことを書いてみます。

プロジェクト、憧れ、好きという感情、学び

4月の月間カンファレンスで、さくらのプロジェクト保育について説明しました。同じテーブルにおられた福島昌子先生（当時 M2、現福井大学教職大学院教授）から「なぜプロジェクト保育なのか？」と質問されました。「プロジェクトが好きだから」、さらに「なぜプロジェクトが好きなのか？」と質問を受けました。

「大学4年生から大学院、IT系の会社で、IT分野のソフトウェアシステム開発プロジェクトで人生を送ってきました。プロジェクトには必ず大なり小なり修羅場があり、不安定な事象があり、さらに学びがありました。」「6年前に、就学前保育でのプロジェクト保育を大豆生田先生（玉川大学教授）や汐見稔幸先生（東京大学名誉教授）から教えていただいたき、夢中になって活動に取り組んでいる子どもの姿に、あのような保育をしたいと大きな憧れを持ちました」と答えました。しかし私の心中では、「なぜプロジェクト保育か」という問いが、折りに触れ問い続けていました。

ソフトウェアのシステム開発プロジェクトは、人生と同じようなサイクルを経過します。横軸を時間、縦軸を要員数（または要員の活動量）に取ります。プロジェクトは、誕生し、成長し、頂上に達した後に、下り始めます。最後に横軸に到達して、目的とするシステムが完成します。そして完成したシステムの運用・保守プロジェクトが始まります。運用・保守プロジェクトも同じような経過をたどり、次期システムの開発プロジェクトが始まります。大学4年時から会社を退職するまで経験してきました。

数十年前の大学院生時代に時計の針を戻します。プロジェクトに憧れを持ったのが、大学院で、徳田

英幸先生（現国立開発法人 情報通信研究機構 理事長、慶應義塾大学名誉教授）が行っていた、分散処理コンピュータシステムをハードウェアとソフトウェアから開発する野心的なプロジェクトでした。徳田先生は、楽しそうに研究活動や研究発表をされていたことを記憶しています。またその頃に読んだ「超マシン誕生」1)に書かれた、Eclipse MV/8000(データ・ゼネラル社)というコンピュータシステムの開発話も私を捉えて離しませんでした。試行錯誤の上に試行錯誤を重ねて、決して諦めずに、一步一步と目標に向かって研究開発する研究者やエンジニアの姿は、私の憧れでした。

さて幼児教育にプロジェクト保育を取り入れたことについて書いてみます。子どもたちは自分たちの思いや願い、憧れを実現しようとして、沢山のつぶやきを発します。子どもたちは、物事に集中することが難しくても、毎日の試みが失敗しても、自分たちの思いや願い、憧れから発しているからこそ、毎日毎日、目当てに向かって活動できるのでしょう。活動が好きになるのだと思います。

「好きになること」は私が思っている以上に大変重要なことなのです。なぜなら好きなことは、脳の報酬系へ正の報酬を与えます。これが好きなことを続ける動機になります。また外部の刺激（大人が褒めたり、ご褒美を与える）も、脳の報酬系への正の報酬になります。しかし外部の刺激は、与えるたびに刺激量を大きくしないと、同じ報酬にならないと言われています。

プロジェクト保育は、その活動が楽しくなるように一人ひとりが工夫できる余地が大きいと考えています。プロジェクト活動が、楽しい限りは活動を継続できます。また子どもは面白くなくなってきたら、活動が楽しくなるように工夫をしたり、楽しくなるように、大人を動かそうとします。

楠木健先生（一橋大学大学院国際企業戦略研究科教授）は、2)で、「好き」と「ビジネスの優位性」について述べています。楠木先生は、好きなことをすることの決定的な優位は、ネガティブな状況にやたらと強いことと述べています。引用します。

「成果が出るまでは長い時間がかかるのが普通である。だからこそ、いいときも悪いときも、長期の継続が大切になるのである。そのことが好きであれば、すぐに成果や報酬に結びつかなくても苦にならない。ここに「努力の娯楽化」の本質がある。」4)

「努力の娯楽化」とは、「到達するまでのプロセスを好きなこと(楽しめること)に変換できること」と理解しています。楠木先生の競争戦略論の「努力の娯楽化」と幼児教育のプロジェクト保育の優位性は、同じ基盤で論じられていることに気がつきました。

プロジェクト保育を支える営み

小嵐先生(福井大学教職大学院客員教授)は、3・4・5歳児で、プロジェクト保育活動を成立させるためには、未満児でどのような活動をしているのか、気になったと質問された。2歳児の担任が、プロジェクト保育の基盤を作るための保育活動していることを説明していた。

小嵐先生の質問から触発されて、さくらのプロジェクト保育活動を支えていることについて考えてみた。

2歳児のプロジェクト基盤づくりを支えているのは何かと考えてみた。さらに1歳児、0歳児と降りていくと、結局、0歳児と1歳児での、一人ひとりの生活活動と生活リズム、つまり規則正しい食事と睡眠と排泄と、好きな遊びの保証に行き着いた。例えば1歳児でおむつからパンツに移行することで、2歳児・3歳児の先生は、子どもたちの排泄支援の時間と労力を、遊び支援やプロジェクト保育の時間と労力にできるのだ。つまり担任が30名の2歳児のおむつを交換する時間は、子どもたちが自らズボンとパンツを脱いでトイレに行き排泄する主体的な活動に

変容しているのだ。その時間、担任の先生は、次の活動の準備に充てられるのだ。

なぜ私達は保育・教育をしているのか?

2019年8月3日 CEDEP3)主催の公開シンポジウムで、小玉重夫先生(東京大学大学院教育学研究科教授)が話されたことは、私を捉えて離しませんでした。小玉先生は、保育の質の向上の議論の中で、保育が社会市民の育成につながることを話された。社会に参画する主体の育成から、保育者の役割は、社会適応の指導から社会改革の主体の育成となるのだと。未来の社会改革者の育ちに関わっているのだと。

教育・保育の根源的な価値はという問いに、私はなんと答えられるのだろうか?

最後に

たくさんの素敵な先生方、個性ある院生の先生方と、楽しく素敵なラウンドを過ごせた1年間でした。ありがとうございます。2020年は、初手からコロナウイルスの蔓延で子どもたちの学びや育ちが保証できるのか、子どもたちの育ちを見ていただく行事をどうしようか、子どものいる職員の生活はどうなるのかなど心配事の尽きない年になりそうです。コロナウイルスに心が折れないように、子どもたちの日々の遊びと生活を守っていききたいと思います。

- 1)「超マシン誕生」トレイシー・キダー著、糸川訳 日経 BP 社、2010
- 2)『「好き嫌い」と才能』楠木健著、東洋経済新報社、2016
- 3)東京大学大学院教育学研究科付属 発達保育実践政策学センター

語ることは学ぶこと～教職大学院での1年を振り返って～

勝山市立村岡小学校 北川 喜樹

「学校内外の学びのコミュニティをマネジメントする」ことを主眼に、教職大学院で学びながら自分なりに活動を重ねた1年だった。このテーマを頭に置きつつ、ここ教職大学院でさまざまな先生方からお話を聴いたが、少々乱暴にまとめれば、先生方が感じておられる課題は以下の2つのグループに大別できると感じた。

- (1) どうしたら全ての先生をその気にさせられるか

- (2) 教員の学びのサイクルをどのように組織化していくとうまくいくか

ちなみにこれらは、私のテーマとも直結している。

1つ目の課題は、全国のどの学校にも、程度の差はあれ存在するだろう。どのような研究や実践を進めるにせよ、教員一人一人が常に自己成長しようとする状態を作ることがまず求められるからである。私たち教育公務員は「絶えず研究と修養に努めなければならない」と規定されているが、その教育実践に取り組む姿勢の在り方は、基本的に教員個人の自

主性に委ねられてきた。このシステム自体が性善説で構築されており、「進んで研究と修養をしない教員にはどのように対応するか」が規定されていないため、「その気にならない先生がいて困る」という状況が生まれてくるのは当然の流れである。

困ってばかりいても仕方ないので、どうするか……。私が院生の方々と対話やラウンドテーブルでの交流を通して有効だと感じた手立ては、「先生方の仕事に意味づけを行う」とことと「組織全体における各自の仕事の意義や意味を見える化する」とことという、結局はこれまでもよく言われてきたことであった。自分の仕事にどんな意味があって、それが学校や社会にどう貢献しているのかを自覚するように促すと同時に、今、誰の頑張りで学校が回っているのかを互いに感じられるようにすれば、教職員の同僚性がより高められると思う。それが、先生方に「その気になってもらう」要素のひとつではないだろうか。

2つ目の課題については今も試行錯誤しているが、組織をうまく回していくためには、少なくとも教員間の対話や議論が生まれる場と時間を学校内に確保し、互いの認め合いを積極的に促すことが不可欠だろう。指導主事訪問や研究発表会などの公開授業で、事前に教員仲間が指導案や授業に対して意見を出し合うなどして授業者を支え、公開授業をやり切った授業者を皆が認め、ねぎらうといった経験を重ねるうちに教員間の結束が高まっていくのはよくあることだ。このような対話や認め合いの「重ね塗り」は教師集団の雰囲気を良くしていくものである。

また、授業改善が進み、学びのコミュニティがうまく機能している学校では、仮説を立て実行し、評価や修正を行い、修正内容を実行して再び評価と修正を重ねるというサイクルが比較的短いスパンで行われている。「修正主義」とも言えるこの方法では、学びのサイクルがこまめに重ねられている実感がある。学びのサイクルがうまくデザインされているか

らそうなるのか、小まめにサイクルを重ねた結果として仕組みができあがったのかは今後検証の必要があると思うが、いずれにせよ、「学びのサイクルの多重化」は結果として学びのコミュニティを機能させる一つの要因であることは間違いなさそうだ。

繰り返すが「教員組織がうまく機能しない」という課題は、全国どこにでもよくある話だ。そしておそらく、その原因のほとんどが学校内部の環境にある。教職大学院での議論で多くの先生方から出された、教員の「対話」の重要性が、やはりキーとなると今年1年で再認識できた。対話って大切なんですよ、やっぱり。

また、教職大学院では福井県内はもちろん石川・岐阜・奈良・滋賀・静岡・東京・福島・和歌山・埼玉・茨城…など普段ならそこへ出かけなければ話できない先生方と交流でき、職種としても小学校から高校・特別支援学校・行政までさまざまな立場の先生と意見交換ができた。このような経験は、ここ以外ではそうそうできるものではない。その面からも、教職大学院での学びは私にとって貴重な機会であった。教員の仕事や思考は、学校の中だけに留まっていはいけないのである。子どもたちを社会に送り出す仕事をするのが学校の役目であるならば、学校自身が社会に目を向け、地域の方々と異なる職種の方々、他地域の学校と結びついていなければ話にならない。次年度も、多様な先生方と交流できるのが今から楽しみだ。

最後に、本年度末で教職大学院での学びに区切りをつけられる先生方、ご卒業(?)おめでとうございます。諸先輩方が執筆されたレポートを読み返すたび、長いスパンの中でプロセスを見取る力をつけることの大切さを痛感しました。ここでの学びを生かし、学校現場で今以上に活躍されることと思いますが、そのためにも健康には十分お気をつけください。

1 年間のふり返りと今後の展望、修了生に向けたメッセージ

坂井市立長畝小学校 齋藤 雅実

「1 年間のふり返り」

福井大学教職大学院における1年目は、私に「省察と協働の大切さ」を気付かせてくれた。

4 月月間合同カンファレンスは、「自分の歩みを振り返る」だった。これまで自分の実践を振り返るこ

とはあまりなかった。新採用からこれまでの28年間の実践—算数科 T・T の有効な形態、国語科の主体的な学び、総合的な学習の時間(「食育」「ふるさと学習」)の主体的な学びと各教科との関連、道徳科指導と評価の一体化—を振り返ると、その殆ど

が個人や学年での取組みで、実践の成果の対象は限られた児童であった。4月の時点では、まだそのことに気付くことはなかった。しかし、教職大学院での1年の学びを終えた今は、いかにして研究の成果を学校全員の児童に還元できるかを考えるようになった。そして、教職員全員が同じ目標に向かって研究に取り組み、協働することが大切なのだと思うようになった。これも教職大学院というコミュニティの一員として、カンファレンスやラウンドテーブル等を通して他のメンバーと語り、気付いたり考え直したりすることで学びを深めることができたからであろうと思う。教職大学院のメンバーは、幅広い年代と異なる校種や職種で、話される内容や考えは、私にとって刺激的であった。また、教職大学院の先生方には、勤務校の授業参観や事後検討会に2回参加していただいた。検討会でテーブルを囲み、外部からの新たな視点でお話をしていただいたり、児童の学びの様子を教えていただいたりしたことで多くの気付きを得ることができたことは、学校として大きな収穫であった。先生方に心から感謝申し上げたい。

私たち一人一人の学びは小さいものであるが、コミュニティとなって授業実践を省察し、協働して研究を深めていくことで、1年で大きく成長することができたと思う。職場のコミュニティの協働と同僚性の高さは、長畝小学校の強みだと思う。教職大学院に通う中で、授業研究を通して「学校」をどのようにして改革していくとよいか考え、意識を改革し、

教職大学院での学びを生かしながら、研究主任として校内研究に取り組むことができた1年であった。長畝小学校の先生方にも心から感謝申し上げたい。

「今後の展望」

令和2年度も研究主任として校内研究を推進していく。道徳科や各教科において、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が、子どもたちの学びの姿として現れるようにしていきたい。そのためには、各自が授業の展開を今一度振り返り、実践と省察を繰り返しながら、低・中・高学年部会の3つのサイクルがそれぞれ回転したり、時にクロスすることで新たな刺激となったりして、全体の学びが深まっていくようマネジメントしていきたい。そして、ICT機器を利用しながら業務改善を常に意識し、効率よく研究を深めていきたい。

「修了生の方へのメッセージ」

初めてのカンファレンスやラウンドテーブルでは率先してお話してくださったり、これまでの実践と理論とを結びつけながらわかりやすく教えてくださったりして、大変感謝しております。教えていただいた多くのことを実践に生かして参りたいと思います。修了生の方のように頼れるM2になれるよう頑張ってお参ります。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

自ら学び続けるための基盤

福井市中藤小学校 伊達 薫里

放課後、子どもたちのノートに目を通していった。「僕は、頑張ってくれている地域の人たちに感謝の気持ちを伝えるためにも、あいさつを頑張りたい。僕は、そう決めたのだから。」「地域のためにこれからも、小さい子たちの面倒をしっかり見てあげようと思う。そう決めたのだから。」とあった。「決める」という言葉は、日ごろから意識して子どもたちに投げかけているのだと改めて気づく。私は「深い学び」を「決める学び」だと捉えている。「僕は、こう思う」「私は、こんな風に生きていきたい」と自らの意思で決定し、夢と希望をもって生きる子どもたちを育てることが、公教育の使命であると考えている。社会科で「地域の人たちは、まちの安全を守るためにどのようなことをしているのだろう」と

いう問題を解決した時間の「振り返り」に綴られていたものである。子どもたちの学びは連動し、繋がっている。それは、教師が意識的に学びを紡いできた結果であると同時に、子どもたちも学びを繋いでいこうという思いが表れていると感じ、とても嬉しかった。

本年度は、総合的な学習と道徳科を核にした、「カリキュラムマネジメント」に取り組んだ。〇〇教育という名のもとに、現場に入り込んでいる教育内容は年々増加の一途をとどっている。何かをスクラップし、というよりすべてをスクラップし、本当に必要なものを積み上げていくことこそが、今まさに必要であると感じている。そんな中、学びと学びを紡ぎ、子どもたちの追究意欲が途切れないように教育

内容のマネジメントを行わない限り、限られた時間の中で豊かな学びは具現できない。そこで、総合的な学習が始まる3年生という時期に、地域に目を向け、地域に誇りをもって、ずっと大切にしようとする心を育むためにはどうしたよいか、学年協働で考え、実践した。核になっていたのは、「中藤地区に住む人を幸せにしたい!」という思いである。「たい」という言葉には、「隊」:集まりという意味と、「want」:願いという意味を込めてプロジェクト名を考えた。年度の最後には、「中藤のお宝発信プロジェクト」に取り組んだ。どうして、それをお宝に選んだのか、どうしたらみんなの宝であり続けられるのか、そのためにどんな風になったらもっといいのか、様々な視点で考え、プレゼン資料作りに取り組んだ。何を見せるのか、いつ、どのように見せるのか、どんな言い方をするとよいのか、資料や言葉を吟味しながら、主体的・協働的な活動は続いた。2

月18日の学校公開日。保護者に向けて、自分たちの考えを堂々と発信した。

そんな子どもたちの心の成長を後押ししていたのが、道徳科の実践である。「相手のことを考えて、みんなのことを考えて、みんなのために、地域のために自分たちができることをやっていきたい、だって支えてくれる人たちがいるから。感謝の気持ちを伝えたい。」そんな思いが、彼らの活動を支えていたことは、間違いない。

学びが変われば、子どもが変わる。子どもが変われば、学校がそして、地域、社会が変わる。小さな歩みではあるが、一歩ずつ、本年度も子どもたちや同僚の先生方と共に、楽しい学びの創造に取り組んでいきたい。

1年を振り返って

福井県教育総合研究所 坪川 美穂

私が教職大学院に入学しようと思ったのは、教育総合研究所教育相談センターの研究を進めていく中で、自分のマネジメント力を向上させる必要性を感じたからである。教育相談センターでは、平成28年度より県内の中学校にピア・サポート活動を柱としたプログラムを提供してきた。このプログラムは、仲間同士の認め合いや支え合いを通して、思いやりのある子どもたちを育て、思いやりのある学校風土をつくることを目指すものである。これまでプログラム実践に申し込みのあった学校に携わる中で、先生方がピア・サポートについて共通理解し、意図的・計画的にプログラムを教育活動の中に取り入れ実践していくことがプログラムの実効性を高めるために大切であり、そのサポートをしていくことが研究所の役割であることが明確になっていった。そして、自分にマネジメント力がなければ、そのようなサポートは出来ないと思い、教職大学院で学ぶことを決意した。

今年度はプログラムを普及させる手立てを構築することを目的とし、「指導案とプレゼンテーション資料とワークシートがあれば、所員が入らなくてもプログラムの授業実施が可能である」という仮説のもと、研究協力校において実践研究を行ってきた。教職大学院入学当初は、実践研究を行うにあたって、

研究協力校との協働や教育相談センターの所員との協働についてしか考えていなかったが、カンファレンスやラウンドテーブル、集中講義に参加し、いろいろな方とセッションを繰り返したり書物をじっくりと読んだり実践をまとめていったりする中で、研究所全体の所員との協働や他機関との協働などといったことも意識しながら実践研究を進めるようになっていった。

来年度より、ピア・サポート活動を柱としたプログラムは、福井県版ポジティブ教育プログラムの1つとなる。福井県版ポジティブ教育プログラムは、児童生徒に「幸福を自ら創り出していく力」を学校教育において育てることで、「持続可能な幸福を育む学校づくり」を指すとともに、児童生徒の自己有用感や集団への適応感を高めることを目的としている。

これまでの実践研究で得た知見、教職大学院での学びを生かして、福井県版ポジティブ教育プログラムの実践に取り組んでいきたい。また、来年度は、チーム支援の主担当をすることとなった。まだ自分の中ではっきりとした構想はないが、「すべての子どものために」を合言葉に取り組んでいきたい。

最後になりましたが、修了生の皆様、御修了おめでとうございます。自分の実践や思いをうまく語れ

ず、非常に分かりづらい私の話を、いつも根気強くじっくりと聴いていただき、ありがとうございます。皆様からいただいた感想やアドバイスを忘れず、

これからも学び続けていきます。皆様の今後ますますのご活躍をお祈りいたします。

1 年間を振り返って

福井県立丸岡高等学校 西岡 晃未

1. 1年間の振り返りと今後の展望

私が勤務する丸岡高校は、平成31年度、文科省の「地域との協働による高等学校教育推進事業 グローカル型」研究校に指定された。以前にも増して、丸岡高校の特色ある取組を実現していく必要があった。そして、その取組を進めるためにも、私は教職大学院で多くのことを学びたいという気持ちで入学した。また、授業力向上で手腕を発揮されていた先輩教員が異動され、私はその先輩の後を引き継いで、授業力向上チームのリーダーをすることになった。予想さえしていなかった先輩の異動であり、とても不安だった。その不安を少しでも解消したいという思いが、年度当初の私の気持ちだった。

教職大学院では、毎月行われる月間カンファレンスで、資料や実践報告を読ませていただいたり、多くの方々から指導をいただいたりしながら、自分の実践を見つめ直すことができた。ラウンドテーブルでは、全国からいらっしゃった方々と交流し、とても刺激になった。教職大学院は、実際に学校で取り組んでいることを話したり聞いたりできるので、校内でも実践ですぐに取り入れて、調整できるところも一つのメリットだと思う。しかし、そのメリットを生かせないことが多々あった。それは、自分自身がやりたいことを見失っていたからである。授業力向上チームという一つの組織をどうしたいのか、何を目的としているのかなど、自分の中ではっきりと答えがわからないまま過ごしてしまっていた。地域との協働についての研究校として学校全体が取り組んでいることと、授業力の改善との兼ね合いが結びつかず、立ち止まることが度々あった。授業力向上チームのメンバーは、とても意欲的で協力的で、本当に良いチームである。それなのに、その良さを十分に発揮させることができず、メンバーの時間や能力を持て余すことになってしまった。その悩みを話し、解決の方向に向かえたのも、教職大学院での学びだった。他校の実践から学んだり、何回か同じグループになった院生にアドバイスをもらったりしな

がら、なんとか1年間を過ごすことができたように思う。

この振り返りを書いていると、教職大学院で学んでいることが、いろいろと実践できていないことを実感した。そして、反省すべき点を多く見つけることができた。本で得た知識もカンファレンスで感じたことも、実践に繋がれず自分のものになっていない。授業力向上チームのリーダーとして、今年度はほとんど何もできなかった。リーダーの素質について、チームに方向性を示すことが大事だと実感した。そして、メンバーの一人一人が、このチームに所属することで得られる価値、存在感を感じられるようなしなやかさを考えたい。一つの取組を成し遂げることが目的ではなく、その取り組みでその組織をどのように動かしていくかを考えることが組織力だと思う。

今後は、自分のやりたいことを見失うことなく、教職大学院での学びを再確認しながら、来年度の実践に繋げていきたい。

2. 修了生へのメッセージ

たった1年違うだけなのに、学びの姿勢や習得の差が歴然としていて、学びの深さに感服いたしました。月間カンファレンス等で、ご自分の経験をふまえて話してくださったことなど、今でも心に残っております。実践を通して学ぶことが大事である、ということを実感させていただきました。ありがとうございました。

そして、授業力向上チームの先輩として悩み相談や愚痴を聞いてくださったI先生。大変お世話になりました。本校の現状を知っていることもあり、よりの確なアドバイスをいただいたり、応援して下さったり、とても励みになりました。ありがとうございました。

修了生の方々の、今後ますますのご活躍をご祈念いたします。

学びとは

敦賀市立敦賀南小学校 三宅 育代

今、世界のこのような事態に驚きと不安を感じている。先行き不透明な現代、問題に直面した時に、斬新なアイデアと行動力でいかに解決していくべきか。考え、行動できるような「主体的・対話的で深い学び」の必要性を実感している。

今年度、教職大学院で学ぶ機会をいただき、「働き方改革と授業力向上について、諸外国に学び現場で活かす手段の考察」のテーマを設定して自分ができることは何かを追求していきたいと思った。これまで、海外の方と話す機会が何度かあった中、諸外国の学校の教員の働き方も参考に、児童生徒への授業力向上と、教員が公私ともに自己実現できるような働き方をしていきたいと常々思ってきた。日本の学校での教員の働き方の成果である、高い学力水準や規律正しい国民性、教師の授業力の高さに誇りは感じるが、課題である児童と向き合う時間の減少、教員の長時間勤務による仕事と私生活の両立の難しさ、若者の教員離れを不安に感じていたからである。

4月から教職大学院がスタートしたが、ここでの学び方は想像していたような講義形式ではなく、知りたいことを教えていただけるのではなかった。カンファレンスやラウンドテーブルでの対話と書く作業での学びなのである。当初このような学び方に戸惑った。大学院では自分自身で、問題解決に向かえるように考え行動しなければならないのである。実際、日々の仕事に追われ、大学院と仕事との両立も難しく、大学院の学びを仕事に活かしきれないもどかしさも感じた。

大学院では「省察」という言葉がよく使われるが、「自分自身を省みて考える」学びの大切さが今になって漸く理解できるようになった。過去の実践記録をじっくり読み解くことで、実践者の思い、苦労や喜びを自分のことのように感じる事ができた。また、同じグループになった方の話にじっくり耳を傾ける。話を聞くことで、新たな世界を知り、新たな考え方に遭遇できる。また、悩みを語り合い、解決策を探り合う。この1年で多くの出会いがあった。他県から福井に学びに来られる小中学校の先生方、文部科学省の方、大学職員の方など、立場の違う方の話もお聞きすることができた。場所や立場は違っても、子ども達のためにという共通の目的のために日々努力している仲間であるように感じた。このような出会いを通して自分の考え方の視野が広がった1年間であった。

この1年をふりかえり、自分の研究テーマを実践に活かすことは難しく、自分の思いがすぐに結果に表れるものでもないことも感じている。来年度は学び方をより深く学び、学びを現場で少しずつでも実践しながら、未来につなげていくという事実を大切にしていきたい。大学院での学びは、まさに、「主体的・対話的で深い学び」なのである。この学びが問題に直面した時に、斬新なアイデアで解決できることにつながるのだろう。

最後に、修了生の皆さんとの語り合いは、楽しく充実したものでした。このような時間を共有できたことに喜びと感謝の気持ちでいっぱいです。修了生の皆様、ご修了おめでとうございます。



スタッフ

Mさん、そして、皆さんへ

福井大学連合教職大学院 非常勤講師 富永良史

世界を覆った空前の大禍は、僕の周りから音を消しました。曇り空の日曜、自室でこの原稿を書き始めたのですが、外から音が聞こえてこないのです。様々な活動が自粛され、今日は外出までもが自粛要請され、誰も外にいません。こんなに音のない日曜は、経験したことがありません。だからこそ、思います。みなさんと出会い、語らい、悩み、見通した日々には豊かな音が、声が、思いが満ちていたと。

失われた最終カンファレンスに替わり、紙面上で修了生の皆さんにエールを、とのこと。あれこれ思い出したのですが、あれもこれも語って、取り留めがなくなるよりはと思い、ひとりの修了生、Mさんとの出会いをふりかえって、エールとさせていただきます。僕はたまたまMさんと出会いましたが、この教職大学院という場は、誰かと誰かがたまたま出会い、響きあいながら、ともに学びを深めていく場だと思います。だから、僕とMさんとのことについて読んでいただくことで、ひとりひとりの修了生の皆さんが、教職大学院での多様な出会いと学びに想いを馳せる契機になればと思います。

前略 Mさん

出会ってから2年ですか。ずっと前から知っているように感じますが、まだ2年しか経っていないんですね。教職大学院のS先生にMさんを紹介された時、「あ、この人は、教員じゃないな」と直感したことを覚えています。実際にはMさんは正真正銘の教員でしたが、現職教員と教員を目指す若者が集うコミュニティの中では、言いようのない異質感を放っていました。僕はフリーランスのファシリテーターとして、多様な業界に少しずつ関わる日々を送っているせいか、それぞれの人が発するものに敏感になります。その時には初対面のMさんに対して「なんか危ない空気、発してますね。トンガリ方が半端ないですよ」と話しかけたと記憶しています。

非常勤スタッフである僕は、院生のひとりひとりと深く関わる機会はあまりありません。Mさんとも、数ヶ月に1度くらいでしょうか、カンファレンスの

グループが同じになったり、僕のワークショップに参加してくれたり、言葉を交わす機会があった程度です。ですが、Mさんは、僕が追い求めている「ファシリテーション」に、ことさらに興味を示してくれて、ことある度に、鋭い観察眼で、短くとも深く濃いつまみや質問を投げかけてくれました。その度に「あ、自分はこんなことを考えて、あんな振る舞い方をしたんだな」と再確認させられました。よく観てくれているし、背景への洞察が鋭いなあと、感謝と敬意を持ちました。

そして最後の最後に、Mさんと深く関わる機会が訪れました。院生の皆さんが総決算として執筆する長期実践研究報告には教職大学院のスタッフが2人ずつ「読み手」として関わります。僕はMさんの担当になりました。読み手は指導教官のようにも捉えられがちですが、僕はより良い「伴走者」になろうと決めて臨みました。冬季集中講座で、院生の皆さんが執筆に悪戦苦闘している時、Mさんも同じように追い込まれたような表情を浮かべていました。その時、「何かおかしいな」と感じました。初対面の時のトンガリ方、異質感がなりを潜め、何かに従い、枠の中で自分を押し殺しているような表情でしたから。だから、声をかけ、Mさんの語りに耳を傾け、軽く背中を押しました。

それから、執筆が進むたびにMさんは原稿をメールしてくれて、僕はMさんの省察の深まりにリアルタイムで立ち会うことになりました。綴られた濃密な実践と省察を読みながら、Mさんのこれまでの歩みに本当に伴走しているような気持ちになりました。読んで感じたこと、さらに知りたくなったことなどを返信し、Mさんからさらに深まった原稿が返信されてくる、また読む、感じる、問いかける、といったことが何度か続きました。そのようなやりとりの中で、僕は自分の歩みをふりかえっていました。Mさんに問いかけるつもりで、同じ問いを自分自身にも向けていました。ひとりでもいくら考えても考えないであろうことを、Mさんとのやりとりの中で考えていました。僕にとって、歩みをふりかえり、考え

を深めるためには、他者との語らいが必要なのだと実感しました。Mさんは、ギリギリまでつきつめてふりかえり、考え抜き、展望を描き出し、無事に執筆を終えました。

その後の長期実践研究報告会やラウンドテーブルで、自分の実践についての語りを終えたMさんには、出会った頃のトンガリ感が戻っていました。ただのトンガリではなく、奥深い凄みを感じたのは気のせいではないはずです。その時、Mさんは、すでに教員であることを辞め、教員や学校を支援するコンサルタントとしての道を歩み始めていました。初対面の時の「あ、この人は、教員じゃないな」という僕

の直感は、時差を置いて的中していました。

世界を覆う大禍を乗り越えた先に、私たちはきっと、見たこともない世界を生きようになる予感がします。既存の答えに頼るのではなく、ともに答えを創り出しながら切り拓く世界を。それは、ひとりの努力で成し遂げられることではなく、他者に対してしなやかに向きあい、思いを交換しあってこそ可能になるのだと思います。世界を紡ぎ、拓く仲間として、またどこかで、きっと、お会いしましょう。修了、おめでとうございます。

修了生の皆さんへ

福井大学連合教職大学院 非常勤講師 中川 美津恵

教職大学院の学位記伝達式も最後のカンファレンスも中止となり、皆さんと直接言葉を交わすことも出来ないまま、このような形でメッセージを届けることになりました。

皆さん、修了おめでとうございます。

新型コロナウイルス感染の広がりが私たちの命や生活を脅かしている今は、健康管理、感染予防に努め、自制して、終息の日を皆さんと共に待ちたいと思っています。

私の場合、自身の体調不良で2月2日の長期実践報告会、15、16日のラウンドテーブルに参加できず、皆さんがご自分の実践を熱く語る場に立ち会う機会を逸したのも加わり、とても残念に思っています。月間カンファレンスや集中講座の時間が思い起こされます。今までの教職経験やインターンシップで得た体験の中で何を取り上げ、どのように追究していくか、どうつなげて長期実践報告とするかに悩み迷っていらっしやっただのを、グループで聴き合い話し合う中で、方向性が見えた、ヒントがもらえたと少し明るい表情になったのが印象に残っています。また、難解な理論書を読み解き解釈し、それらの理論を皆さんが所属する現場の課題分析や解決に活かし、同僚性の構築、組織マネジメント、働き方改革などに取り組まれていたのが素晴らしいと思いました。改革の目的は何より教育の質を上げることに尽きます。皆さんの取り組みが子どもたちの主体性や創造

力を育むことにつながっている。そう思えたのが嬉しいことでした。

平成から令和に移り、社会ではグローバル化が加速し、AI技術が進歩する中、求められる人材はますます多様化、高度化しています。少子高齢化の進行、エネルギー・地球環境問題など複雑多岐にわたる社会事象の中では、自ら課題を発見し解決できる人材こそが求められています。全国各地の大学では教育改革を推し進め、社会の要請に応えようとしています。人口減少・流出・過疎化に悩む地方でも、リーダー性のある人材の育成、グローバル化する地域で外国人との文化共生など図り、労働生産性を上げようと腐心しています。

福井の高校・中学校・小学校でも地域の活性化をテーマに、児童生徒たちが地域の課題解決に向けた提案をし、傍らで懸命にサポートしている教師がいます。地域の行事、公共交通の利便性、地元食材の活用法、地元特産品の開発などを探る子どもたちの取り組みは町おこしに貢献し、地域創生を担っています。そのような新たな実践や取り組みについて、皆さんと共に学べたことは、私にとって大変刺激になり、頼もしく感じたことでした。

人生100年時代といわれる現代、終身雇用の時代は終わり、将来が不透明で予測出来ない今、答えのない問いに挑戦し続ける子どもたちを育てるため、子どもたちの夢の実現を支え応援するため、伴走できる教師でいてほしいと望んでいます。

そのためには急速に変化する社会に敏感で、学び続ける教師でいてください。

そして、院での学びで得た幅広い人脈、ネットワークを活かし、さらに人脈形成に取り組み、多角的で幅広い視野を持ち続けるよう努めてください。皆さんは互いの実践を分かち合い話し合う中で得られる気づきが大きな力になることを、院での学びで実感してこられたことと思います。交流の場で多様な

価値観を持つメンバーとの対話、意見交換を通して、ご自身の教師像や思いこみが変化した経験をお持ちになったのではないかと思います。

近隣の学校はもとより、所属する市町以外の県外の校種を超えた小中高の学校、諸外国の学校、行政機関、研究機関、大学、文科省まで及ぶつながりが今後の皆さんの活動先で力を発揮すると確信しています。

教師が用意した「正解」を子どもたちが探すというような授業がいけないとは言えないが、つまりいたり失敗したりすることの価値をもっと教育するべきではないか

福井大学連合教職大学院 非常勤講師 花木 秀実

教職大学院修了おめでとうございます。

皆さんは「学ぶ」という明確な目的を持って教職大学院に入学されました（そうでない人がいたかも知れませんが）。これは極めて重要なことだと思います。例えば、教師になること、あるいは校長になることが目的となってしまう、そうなれたことに満足する人もいないわけではありません。大切なことは、何のためにその職に就くのか（目的）、何をしたいのか（志）、何をすべきなのか（使命）ということが明確であることだと思います。

皆さんが身を削るような多忙な教職のかたわら、あるいは教員採用試験にチャレンジしながら、自身の長期にわたる実践をたどり、書きまとめられたこと。そしてカンファレンスやラウンドテーブルで、長い実践の省察を語り、また、他の方々の実践や省察を聴いてこられたこと。そのような学びかたを学んだこと…。すでに、今までに高い課題（問題）意識を持って、質の高い実践をされてきた皆さんですが、ここでの経験は今後の実践や研究にとってさら

に大きな財産となることは間違いありません。これからも、県内外の実践者、研究者の皆さんとのネットワークを生かして、実践と省察をくり返し、さらなる大きな実りを得られることを祈念しています。

冒頭の言葉は、当たり前のことのようで現実には当たり前ではありません。授業を参観すると度々見受けられることです。この1年、カンファレンスやラウンドテーブルで語り合う中で、全国の先生方にもそう考えてもらいたいなあと思うようになりました。ささやかな内容ですが、贈る言葉といたします。

最後になりましたが、これからも健康に気をつけて教職を楽しんでいてください。仕事の上での苦しみ、悩みは必ずあると思います。任命権を持つ経営者でない限り、自分の役職や校務は与えられるものです。うまくいかないときに、自分を責めて落ち込み続けるのではなく、「こんな自分をこの仕事に任命した人が悪いんだ。」と上司のせいにし、当たり前ですが「できるだけはやる。でも、それ以上はできない。」と開き直すこと、これをお勧めします。

修了生の皆さまへ

福井大学連合教職大学院 半原芳子

ご卒業おめでとうございます。本来であれば3月の学位記伝達式にて、直接お目にかかりお伝えした

かった言葉ですが、このように紙面（記した言葉）によりお伝えでき、互いに思いを交流し合っている

ことは、ある意味で福井大学教職大学院らしい、言い換えれば本学教職大学院だからこそ実現できていることのように思います。

週間カンファレンス、月間カンファレンス、ラウンドテーブル、そして夏と冬の集中研究において、私たちは言葉で実践をあらわし、交流し、共に知見をたがやし、そのことを記し自他共有の知恵とし、その知恵を活かしながらまた次の実践に取り組み、その知恵を更新させていくプロセスを、2年間という

長い時間をかけ協働でつくってきました。そのなかで培われた力量は、こうした有事において発揮され、その価値が改めて見出され問い返されるものであると感じています。

私たちはお互い、まだそのプロセスの途上にいると思っています。いつかまたラウンドテーブル等で直接お目にかかり実践交流できる日を、今から楽しみにしています。

ファシリテーターとしてにおける Wait then Speak と Question then Listen と Listen then Connectの事象

Mangulabnan, Pauline Anne Therese Malaya

The AY 2019-2020 included major international projects such as the EJEP training, UF-DPDT JICA training, WALIS-LSIP immersion programs, among many others on top of Fukui-situated DPDT activities. Follow-up trips were done in Uganda and Malawi, and Egypt for the KCCP program and EJEP training, respectively. Simultaneously, DPDT also welcomed its international students doing an apprenticeship in schools in Fukui. As part of the team involved in such activities, facilitating is an inevitable responsibility; it is crucial because the facilitation can make or break the breadth and depth of discussions among the members. In my years in Fukui, I have noticed (including reflecting on myself) at least three patterns of facilitating small group discussions, i.e., wait then speak, question then listen, and listen then connect. Some facilitators opt to wait for everyone to finish before sharing his own perspectives. In this approach, facilitators would ask for others to question or comment on the speaker before sharing his thoughts. Such an approach allows stories to be narrated; however, it can cause for the facilitator to become an upper echelon of the group. Some facilitators would take a bolder role of asking the members questions may direct the flow of the conversation. This makes it easier for first-timers to engage in small group discussions as they find refuge in having to deliver what seemed to be expected. In this case, the direction of the conversation presented in an uncomplicated manner that members can naturally grasp. Yet, it sometimes may cause too much narrowing into a specific topic that inexperienced members may find it

hard to diverge from. For some facilitators, they initially take a back seat and listen to the conversations or sharing that are happening in the group while taking notes on the sides. These notes would eventually be made public to the group to connect ideas tackled during the listening phase. Instead of asking or commenting, the facilitator verifies if the synthesis is acceptable or not. For members used to the conventional facilitator-as-a-leader scenario, they may be lost looking for the facilitator at the start but may eventually understand the strategy. Unfortunately, time may cause issues on the distribution of opportunity if the facilitator is not aware of the mechanism of the group.

All the cases have their pros and cons; there is no one correct strategy. However, as a prerequisite to facilitating, one should also know the approach one normally upholds and when it is being done. A facilitator should be living with the present and the existence of the information being chosen to be brought to the table. The process of shifting from one to another strategy is also crucial in the efficiency of a facilitator to draw out and link ideas to ensure that the discussion is an educational one. For this to happen, a facilitator must be a reader -- a reader of the words, interactions and atmosphere created by each member -- to create a shared vision and establish the value within the group. Most importantly, the facilitator should be aware of why a facilitator is speaking, questioning, listening or connecting. Furthermore, there is a need to communicate such underlying principles with the members to educate the preparation process of discerning the facilitators in each of the member of the community. Hence, one can ask, 'Who am I as a

facilitator?)

To our graduates, I am looking forward to the

initiatives and reforms that you will undertake in your own classrooms and schools.

修了生へのメッセージ

福井大学連合教職大学院 客員教授／福井医療大学 教授 森 透

この度は新型コロナウイルスの関係で、修了式などができずに非常に残念でした。日本だけではなく世界的な大恐慌ともいえる事態に、本当に大変なことと思います。早く収束してほしいと願っています。私は教職大学院では非常勤の客員教授ですので、院生の皆さんと深く協働して考える、行動するということがなかなかできなかったのが残念でしたが、時々、月間カンファレンスなどで若い学部卒院生が、インターンシップでの経験を悩みながら熱く語っている姿をみると、頑張っているな、これからいい教師として成長してほしいな、と強く思いました。

教職大学院は2008年度に設置され10年以上の歴史がありますが、基本的に学校を拠点として、院生を中核として、その学校の教職員全体とかかわり支援を行うことが特徴だと思います。「指導」というかかわりではなく、「協働」してじっくり学校改革に取り組んできたと思います。私は教職大学院の前身の「学校改革実践研究コース」からかかわって来ているので、いろいろな院生がおられました。皆さんは、最後は『長期実践研究報告』を書かれます。

その中に、院生一人一人の格闘の姿が現れています。これからは、その2年間の結晶を持参して、各職場で日常の地道な実践に取り組んでほしいと願っています。

今回の修了生がそれぞれ書かれた『長期実践研究報告』は教職大学院の財産だと思います。現職の先生方は超多忙の中で2年間、院生として取り組んでこられました。今までの現職院生の中で、多忙な中で福井大学に来ることは全くつらくなかったと述懐されていた院生がいました。時間と空間が教職大学院で保障され、学校の忙しさから距離を置き、自分自身の実践を省察することが可能となった、という満足感なのかもしれません。現職院生も学部卒院生も4月からそれぞれの場で、今までの経験を活かし、進んでほしいと願っています。私の大好きな歌に「マイウェイ」があります。自分の信じた道を進む。皆さんのこれからの人生に送りたいと思います。お元気で。

修了おめでとうございます

福井大学連合教職大学院 准教授 ヤスミーン・モスタファ

修了生の皆様、おめでとうございます。一年間大変お世話になりました。去年の4月から今年の3月末にかけて様々な状況を経ての1年間でしたが、その中の皆様の精一杯の学びがそれぞれの現地校に繋がることを祈っています。毎日学校等でお忙しいミドルリーダーやマネジメントコースの先生方や校長、また教員の学校生活に取り組んでいるストレートマスターの先生方に毎日の工夫や悩みを超えていただき、月に一回時間を作り、月間カンファレンスに参加していただきました。この月間カンファレンスは皆様にとっては非常に重要な時間であり、二日間にかけて先生方や校長それぞれが日々取り組んでいること、悩んでいること、学校やそれぞれの学級に取

り入れようと工夫していることについて話し合う場を設けられ、先生方がグループの中でそれぞれのチャレンジや工夫、実践等について共有する時間を取ることができ、非常に貴重な場面でした。福井大学のスタッフとして皆様の議論や話し合いに参加させていただき、皆様の実践や日々の取り組みに感動しました。皆様のご経験から色々と学ぶことができました。通常の学校生活で時間を取ることがなかなか難しい皆様にとっては、月間カンファレンスの二日間は、短い時間ではあるが、少しでも時間が取れ、過去の実践を読み取ったり、様々な資料を読んだりし、自分の取り組みと違う実践に取り組んでいる他校からの先生の経験を聞いて初めて、自分の今まで

の実践について考え直したり、省察したりすることができたと言えるでしょう。

それから、夏期の集中講座や冬の集中講座に通常よりの時間が取れ、皆様ご自分の取り組みや研究に集中して進める期間が設けられ、非常に有意義な時間が過ごされたことでしょう。また、ラウンドテーブルのような大規模な集会に、年齢や専門を超えた日本全国からの教育関係者が集まり、皆様が自分の実践や取り組みについて語り合ったりする非常に貴

重な時間を過ごされ、非常に実りの多いご経験だったと思います。

大学院で得られた学びは、皆様にとっては成果のあるもの、職場につながるものであるよう祈っています。

皆様のこれからのますますのご活躍を心より祈っています。

【編集後記】実施することができなかった 2019 年度最終カンファレンスの代替措置として、Newsletter 特集号を編むこととなりました。年度末始めの落ち着かない日々の中で、原稿をお寄せいただいた院生、スタッフの皆様、ありがとうございました。紙上カンファレンスを編むことで、顔を見て語り合うカンファレンスとじっくりと書かれた文章に向き合うこととそれぞれの魅力があることを実感いたしました。先生方のご健康とご活躍を祈念し編集後記と致します。

教職大学院 Newsletter **特集号 vol.2**

2020.5.3 内報版発行

2020.5.23 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp
